令和３年度

史跡古津八幡山　弥生の丘展示館
企画展関連講演会

記録集

2022

新潟市文化財センター

目　次

第１章　企画展関連講演会の記録

企画展２関連講演会（第１回）
東海からみた邪馬台国時代の新潟－登呂の洪水以後の東日本－（篠原　和大）　……1

企画展３関連講演会（第２回）
新津丘陵の縄文遺跡～縄文土器の形と文様の変化～（田中　耕作）　……18

第２章　企画展の概要と企画展関連講演会アンケート結果

（１）令和３年度「史跡古津八幡山　弥生の丘展示館」企画展の概要　……39
（２）企画展関連講演会アンケート結果　……41
（３）令和２年度古津八幡山遺跡発掘調査写真　……45

本書は、新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター（以下、市文化財センター）が、令和３年度に催した「史跡古津八幡山 弥生の丘展示館」企画展関連講演会の記録集である。

スライドは講演会当日に使用されたものを基本的に収録したが、都合により編集したものや除いたものが一部ある。また、当日紙で配布された資料については、紙幅の都合上、一部を除いて省略した。

第２章には各企画展の概要と、関連講演会のアンケート結果等を収録した。

本書の編集は相田泰臣・平山千尋・八藤後智人（市文化財センター）が行った。

※表紙写真：令和３年度の確認調査で新たに見つかった古津八幡山遺跡方形周溝墓の調査風景（北東から）

講演風景（第１回）

講演風景（第１回）

講演風景（第２回）

講演風景（第２回）

企画展１　展示風景－１

企画展１　展示風景－２

企画展１　展示解説風景

企画展２　展示風景－１

企画展２　展示風景－２

企画展２　展示解説風景

企画展３　展示風景－１

企画展３　展示風景－２

企画展３　展示解説風景

企画展３　展示風景－３

■令和３年度 企画展２関連講演会（第１回）

東海からみた邪馬台国時代の新潟
－登呂の洪水以後の東日本－

篠原和大（静岡大学人文社会科学部教授）

はじめに

皆さん、こんにちは。静岡から参りました篠原と申します。今日はよろしくお願いいたします。ただいまご紹介いただきましたように、私は静岡大学で考古学を担当しておりまして、普段は登呂遺跡の復元された水田で田起こしから始めてコメの栽培を実際にやってみて、当時の農業がどうだったかとか、そんな研究をしています。

邪馬台国の時代

（スライド１）今回は「倭国大乱～律令国家成立までの越後平野」に関連してお題を頂いて、「東海からみた邪馬台国時代の新潟」、副題が「登呂の洪水以後の東日本」ということでお話をさせていただこうと思っております。ただ、私はずっと静岡のことを研究しているものですから、タイトルには「邪馬台国時代の新潟」とありますが、新潟のことはあまり明るくありません。スライドに古津八幡山遺跡と登呂遺跡の写真があって、時期が厳密に言うと少しずれますけど、ほぼ同じ時代ですね。ですので、新潟の方の話は古津八幡山遺跡などについて少し触れて、静岡とその周辺の東海地方の同じころのお話をしていきたいと思います。それで、最後に少しふたつを比較してみようというのが今日のねらいです。

それから、副題に「登呂の洪水以後の東日本」とあります。古津八幡山遺跡など新潟のほうでは高地性の環濠集落が有名で、邪馬台国時代の倭国大乱の証拠ではないかということで議論されていると思います。同じころの登呂遺跡で、写真のような農耕集落が築かれますが、最期は洪水で埋もれて、集落が終わってしまうんですね。洪水で埋もれるというのは、かつては登呂遺跡の独自のストーリーの最後の１コマだったんですが、最近静岡近辺でも登呂遺跡が埋もれるのと同じ時期に、いろんな遺跡が洪水で埋もれることが分かってきました。それから、自然科学的な方法で当時の気候を復元するような研究が出てきて、どうも登呂遺跡の洪水のころに全国的にも極端に降水量が多い年があって、そのあと気候変動が起こってくるというようなデータが出てきています。そう考えると、登呂遺跡の洪水というのは登呂だけの出来事じゃなくて、日本列島全体でそういう気候変動が始まったきっかけだったんじゃないかということが言われるようになってきました。だから古津八幡山遺跡に高地性の環濠集落がつくられて変動・動乱の時期が始まる辺りと関連して、登呂が洪水で終わってそのあとやっぱり気候変動の時代に入る。そんなことが関係してくるんじゃないか。そういったことにも注意しながら、最後にまた、新潟と太平洋側の静岡の話を比較してみたいと思っています。

新潟と静岡

（スライド２）つい最近静岡から山梨まで中部横断道という高速道路がつながりました。太平洋岸と日本海側をつなぐ道路の一部で、昔からこういうキャッチフレーズがあったんですね。「君は太平洋を見たか　僕は日本海を見たい」。静岡から山梨に行くのには静岡から興津川を経て富士川を上がっていく。高速道路も同じルートを通っています。甲府盆地に出て中央道を北に上がっていって、野辺山高原を通って、佐久小諸インターに到達するんですね。そこまでの道が完成したという話です。つぎはこの佐久辺りから新潟に行こうとすると、関越道に行ったほうが速いんですかね。でも、今度は新潟から信濃川、千曲川とたどっていくと、佐久とか小諸の辺りまで行くわけですね。静岡の同僚が新潟の小千谷という所で何年か前まで発掘をしていて、小千谷の地元の人に、信州のほうを台風が通過すると、信濃川にりんごがいっぱい流れてくるんだっていう冗談話を聞かされたということを聞きました。ということは小諸の辺りで千曲川にりんごを流すと、結局新潟までそのりんごが流れ着くだろうと。一直線にこうつながっていて、川を伝っていけば新潟までたどり着くことができた。

邪馬台国時代、実年代だと２世紀から３世紀ぐらい。弥生時代から古墳時代にちょうど移り変わる頃です。弥生時代頃までは静岡と新潟の間の直接の交流はあまりなくて、静岡辺りは信州辺りと隣り合っ

ていますので、その間の交流。また、信州と新潟のほうとの間で交流があって、そういうふうにしてつながる。そのあとの古墳時代、静岡では高尾山古墳という古墳時代の初頭ぐらいまでさかのぼる前方後方墳が見つかっています。高尾山古墳からはいろんな地域の土器が出ていて、その中にどうも新潟の土器も混ざっている。新潟の土器そのものじゃないかもしれないんですけれども、明らかに新潟の影響がある土器が。ですから、そのくらいの時期になったら信州とのリレー式の交流ではなくて、どうも直接新潟から人が来ている可能性があるということなんですね。すると当時高尾山古墳の近辺に、新潟から来た人たちがいた。そのころ「太平洋」とか「日本海」とは言ってなかったと思いますが、静岡に来た新潟の人に「太平洋を見たかい」、「僕は日本海を見たい」と、そういう交流があったかもしれない。というようなところからお話を始めたいと思います。

邪馬台国時代の新潟と静岡

（スライド３）最初に少し整理してみようと思います。「邪馬台国時代」というのは、弥生時代後期から古墳時代初頭頃、２世紀後半から３世紀の中ごろでしょうか。その時期の「新潟」と「東海」、「東海」といってもその東のほうの静岡の話が中心になりますけれども、その中で何が起こっていたのか。

まず、新潟の話は最初にちょっとだけ触れるのと、今回の展示と図録にお任せして、せっかくですから静岡の話を中心にしたいと思います。古津八幡山遺跡と同じころに静岡とその近辺で何が起こっていたのか。①の登呂遺跡の盛衰というのは、弥生後期の前半のころの出来事で、そのあと静岡でもいろんな、「動乱」と呼ぶような出来事が起こってきます。②の愛鷹山の山麓には、後期の後半に非常に標高が高い所に大きなムラが出現します。古津八幡山遺跡と似たような状況かもしれません。また、③「菊川式土器の関東地方への移動と環濠集落」とありますが、静岡のすぐ隣の地域辺り、菊川とか掛川といった地域の人たちが急に関東地方に出掛けていくような状況、土器からその動きがわかってくるんですが、移動した先で盛んに環濠集落をつくっているということがあります。ですから、いろんな動きの中で見ると、静岡でも高い位置に移動する村があったり、関東のほうに移動して環濠集落をつくったりと。古津八幡山遺跡と同じようなことが静岡でも起きているっていうことですね。古津八幡山遺跡も、古墳時代の始まりごろになってくると村が終わってしまうと言われていますけれども、静岡近辺でもそういう環濠集落の時代というのが終わって、先ほどお話しした高尾山古墳が出現する。北陸系の土器、もしかしたら新潟の土器が高尾山古墳に行っているということがわかります。この間大体100年ぐらいだと思うんですね。「邪馬台国時代」のもとは『魏志』倭人伝に邪馬台国のことが書かれた時代ということなんですが、それをたどってみて、また最後に新潟との比較をしてみたいと思います。それが３．ですね。そういうふうによく見ていくと、古津八幡山遺跡などの新潟の弥生後期の遺跡の状況と静岡、関東の辺りの遺跡の状況が似ているようなことがあるんですね。さらにそのあとの時期に広い範囲で人と土器が動く。高尾山古墳に新潟の人が来た時期ですが、それもどういうことなのか。そんなことで話をまとめていきたいと思います。

１．邪馬台国時代の新潟と東海（静岡）

邪馬台国時代の時間軸

（スライド４）新潟と静岡、先ほどの地図で測ってみたら、330キロぐらい直線距離であります。それほど離れていて、ほぼ同じ時期の話だと言いましたが、はっきりしないことも多いし、僕の勉強不足もありますので、こんな表でまとめる段階ではないのですが、おおざっぱなところで、時間軸と新潟と静岡あるいはその周辺の様子をまとめてみました。

ですから、この表で新潟と静岡を比べて横に並んでいるから同じ時期だというのはなかなか言いにくいのですが、その辺は容赦してもらって表を見ていただきたいと思います。「邪馬台国時代」は考古学の時代の区分でいくと弥生時代と古墳時代の間ぐらい、弥生時代の後期頃ですね。『魏志』倭人伝の話で「倭国乱」というのがあって、それが「桓霊の間」などと書かれていますが、A.D.180年前後、２世紀の後半ぐらい。大体西暦の150年ぐらいから２世紀いっぱいぐらいがそういう「倭国乱」の時代で、卑弥呼は最後大きな墓をつくって死ぬっていう記載がありますけど、これが247年という年代が言われていますので、３世紀の真ん中ぐらい。だから邪馬台国の時代っていうのは大体２世紀の真ん中から３世紀の卑弥呼が亡くなるぐらいまでの間をいうと思いますが、この表でいくと後期の真ん中ぐらいから３世紀・古墳時代の「終末/早期」と書いてあるところがありますが、そのぐらいの時期までということになろうかと思います。

新潟ではそのころ、この会場の裏にある古津八幡山遺跡が、後期の前半の終わりぐらいから始まると言われています。後期の間、丘陵の上にムラをつくる。周りを環濠で囲む。「倭国乱」の時代、そういう戦いがあった時代、考古学の証拠としては、村の周りを溝で囲む「環濠集落」であるとか、高い所に村をつくる「高地性集落」といったことが、そういった戦乱の証拠ではないかといわれています。まさに新潟の古津八幡山遺跡は両方兼ね備えた、戦乱に備えた集落というのにふさわしいとして古くから注目されてきたのだと思います。

今回の展示のほうに詳しいと思いますが、古津八幡山遺跡だけじゃなくて、いくつかそういう有名な遺跡があるわけです。越後の方の裏山遺跡。それから斐太遺跡は学生のころに、大学にその資料があって、東海系のＳ字甕が出ていたりして気になっていた遺跡ですが、古く調査されて有名な遺跡です。そういった「高地性の環濠集落」が、弥生後期前半の新しい時期くらいから各地で始まって、古い新しいは多少あるでしょうけれども、後期の終わりぐらいの時期に環濠が埋まるということも確かめられているということですね。それが終わって「終末/早期」というあたりになると、その「高地性の環濠集落」が終わりを迎えて、他地域の土器の流入といったことがおこる。

それからもう１つ、新潟の「高地性集落」、「環濠集落」でポイントになるのは、特に古津八幡山遺跡ですけれども、新潟の、北陸北東部系の土器と一緒に、天王山式という、福島のほうの土器が一緒に出てくるという話がありますね。その天王山式と新潟（北陸北東部系）の土器が一緒に出てくる、「環濠集落」の中で「異系統」といいますが、ちょっと風合いの違う土器が一緒に出るということは、やはり由来を異にする人たちが一緒に暮らしていたということになのでしょう。戦乱の中では、もしかしたら対立する人々ということになるかもしれないですけれども、よくよく見ると集落では、何だかんだ言って一緒に暮らしていたということになるのかなと思います。その100年ぐらいの中で、新潟ではそんな歴史がおそらくあった。

一方で静岡では、後期の前半は登呂遺跡がムラを築いた時期。それがどうも後期の真ん中ぐらいに洪水で埋もれる。そのあとに、この近辺で菊川式土器が、おそらくそれを使った人たちが関東のほうへ移動していくような現象がある。あるいは足高尾上遺跡群という、ムラが高い所に移動している。そんな移動の時期というのがあります。

新潟で古津八幡山遺跡が終わるころ、あるいは少しあとぐらいですかね、話題になった高尾山古墳というのがそこあたりまでさかのぼる。その次の段階あたりになってくると、静岡でも定型的な前方後円墳も出現するようになっています。あとでいろんな話をしますので、先に整理して説明させていただきました。

『魏志』倭人伝の頃の新潟

（スライド５）まずは新潟ですが、今回の展示に詳しくまとめてあるかと思います。『魏志』倭人伝の邪馬台国の話にある倭国大乱。その頃、新潟では「高地性の環濠集落」がつくられた。古津八幡山遺跡とか裏山遺跡、斐太遺跡。地図が載せてありますけれども、かなりたくさんの「高地性環濠集落」があります。それが新潟の特徴ということでしょうね。そこでは、特に北のほうの古津八幡山遺跡あたりの特徴でしょうけれども、北陸北東部系と天王山式とか東北系の土器が一緒に出てくる。八幡山式という両方を折衷した土器もあると伺っておりますけれども、そういったものを出す集落・環濠が後期の終わりころに埋没するということですね。

（スライド６）そのあとの卑弥呼の時代。卑弥呼が247年に没して、お墓がつくられたということですから、大体卑弥呼が活躍したのは200年代の前半、３世紀の前半ということになりますが、そのころの新潟を今回展示で扱ってあって、遠いところから土器が来るということです。東海の西のほうの土器だと思いますが、北陸南西部の土器と一緒に新潟にやってくる。あるいは東北、天王山式が激減するという話ですけれども、この時期に北海道のほうの土器が来るという話もトピックとして伺っています。やはり列島の各地域の土器が広域に動く時代だったということでしょう。

登呂の洪水はA.D.127年か!?

（スライド７）静岡の話にいく前に、「登呂の洪水はA.D.127年か!?」という話をしておきたいと思います。今回のタイトルにも「登呂の洪水」というのを挙げていて、実は、今回の話をしようと思ったときに、これが一番目玉だなと思っていたんです。ただ、今は少し不安になっています。もう10年ぐらい前からですが、木の年輪の中に含まれる酸素の同位体比を調べると当時の天候がわかるという研究が急速に進められてきています。中塚武さんという方が

中心になって進められていて、10年前ぐらいにスライド（上の表）のデータが示されたんです。表の下に年代軸がありますが、B.C.50年頃から始まってA.D.300年ぐらいまでのデータがあります。グラフは降水量の変動を示しているということなんですが、下に出っ張っているとかなり雨が多かった。上に出っ張っていると乾燥していた。それが災害となると、下に出っ張っていると洪水で、上は干ばつということになります。この表で目立つのがA.D.127年の降雨が多い年です。A.D.100と150の間に、赤い三角を入れましたけれども、下にどーんと突出している年があるんですね。A.D.127年には極端に木の水分が蒸発しなかったということなんですけども、恐らくずっと雨が降り続いていた。そんな年があったということですね。

それも注目されますけれども、中塚さんは、それを境にあとの時期になると今度は干ばつが続く年があって、また数十年たってから、今度は洪水が続くような年があることに注目しています。ときどき洪水が起こるということがあれば、臨時に対応すればよいという話ですが、洪水の年がずっと続くとか、10年たつと今度急に干ばつが続くとか。そうなるのが人間の暮らしにとっては一番大変だっていうことを言われていて、そういう時代が、127年あたりをきっかけに、そのあと続いたんだと書かれています。その時期は倭国大乱のような動乱を生じさせる最も危険な気候変動があったと。それがこの２世紀の127年あたりから３世紀に至るぐらいまで。まさに倭国、倭国大乱の時期に重なるんですね。そんな時期だったかもしれないと中塚さんが書かれています。

弥生時代後期の登呂遺跡にこの気候の変化を持ってくると。登呂遺跡は後期の初めぐらいに始まって、洪水で終わるんですけども、その間ほとんど洪水のような兆候はないんですね。突然、洪水で終わる。そう考えると、弥生時代の気候変動の中で、やはり127年に突出した雨の年があるのは、登呂遺跡の洪水と重なるんじゃないかと。登呂遺跡だけじゃなくて静岡周辺の弥生後期のほかの遺跡でも洪水で埋まる遺跡が多いので、やはりこれはポイントになるんじゃないかと考えたわけです。

これは私が勝手に思っていたことでもありますが、やはり10年ぐらい前に、愛知県の赤塚次郎さんという有名な研究者がいらっしゃいますが、赤塚さんはやはり伊勢湾の地域でもこれが大きな変動の始まりのきっかけになって、古墳時代へと舵をきっていった。廻間様式という古墳時代初頭の土器様式がありますが、それが誕生するきっかけになったのもこの時期だと説明されています。だから登呂遺跡の洪水の話をすれば、今日の話いけるんじゃないかと思って、タイトルをつけたわけです。

ただその研究、10年ぐらい進められていて、去年それをまとめた本が６冊組で出版されました。『気候変動から読みなおす日本史』。その中で「東海地方における弥生～古墳時代の遺跡変遷と気候変動」という論文を愛知の樋上昇さんが書かれています。その研究によると、スライドの下の表で、さらに前の時期から通してみると、弥生時代の後期の始まるもう少し前ぐらいから急に湿潤な気候に変化していて、それが長期的な気候の変動の中で大きな意味があったんじゃないかというようなことを言われています。表の下に書いてある土器編年の年代と僕が考えていた年代もちょっと合わなくなってきたので、127年というのが本当に登呂の洪水の時期に当たるのかというのは今だいぶ揺らいでいるところです。今後の成果を見守っていこうと思っています。

２．邪馬台国時代の東海～静岡を中心に～

（スライド８）静岡の話をこれからしていこうと思います。スライドは、静岡の平野部を西の上空から撮った航空写真ですけれども、お約束の富士山が入っています。右手は駿河湾。手前の平野部が静岡の街です。真ん中あたりの海側に有度山という三角形の山があって、上部は日本平と呼ばれています。その向こう側に砂嘴が伸びていて、それが三保松原の半島ですね。三保松原は富士山と一緒に世界遺産になっています。静岡の平野部は、旧静岡市と旧清水市が一体になって形成されて、静岡・清水平野と呼ばれています。

登呂遺跡は、ここに少し黒っぽく見えているところです。東名高速道路が南の端を通っていて、水田の一部が調査されています。このほか、登呂の母ムラといわれている有東遺跡がこの辺です。二つの遺跡はともに平野の真ん中にあります。登呂遺跡では広い水田が見つかっていますけれども、地形のことから考えると登呂遺跡は田んぼを開くには非常にいい環境にあったということがわかってきました。手前の方に安倍川が流れているんですが、実は安倍川がこの平野をつくっている。縄文時代に平野部は海だったわけですけれども、縄文時代の終わりにかけてだんだん冷涼化してきて、河川の堆積作用で低い

ところにどんどん土砂が流れ込んで、平野ができる。いわゆる扇状地という地形をつくるんですね。扇状地は洪水のときに土砂が川から熊手状に広がって堆積してできるわけですけれども、緩い傾斜を持っています。扇状地ができたあとは水は上のほうで伏流して、地下水になってしまうんですけれども、それがもう一度、扇状地の端っこ（扇端）に近い所になってくると地表水となって出てくるようなところが多くあります。そうした水は、穏やかで管理がしやすくて、水田に引くことが容易ですし、緩い傾斜がありますから、高いほうから水田の区画をつくっていって水を入れて低いほうに流していくと、水田ってつくりやすいんですね。そういうこと考えていくと、どうして登呂遺跡の周りのような地形に水田が広がったのかとかいうこともわかってきます。

そんなことで、弥生時代の登呂遺跡、静岡の弥生時代の水田が発見される遺跡というのは、この平野の真ん中、扇状地の端っこにあるんですね。その辺は新潟の古津八幡山遺跡とはかなり違う環境にあるということがいえます。

（スライド９）遺跡の立地の話をしましたが、そういう場所に有東遺跡とか登呂遺跡とかあるわけです。先ほどの写真で大体静岡の地形がわかったかと思いますけれども、左上が、弥生時代の中期のころの遺跡の分布を示したものです。有東遺跡と書いてある辺りにまとまりがあって、駿府城（14）のあたりとか、川合遺跡（32）のあたりにも遺跡のまとまりがある。それが右下の登呂の段階になると、遺跡の数がたくさん増えているのがわかると思います。登呂遺跡の周りにも遺跡が増えているんですけれども、登呂遺跡は23番ですね。有東遺跡が21番。登呂遺跡の昭和の調査のときに、周辺の遺跡も調査した結論として、弥生時代後期の登呂遺跡は、弥生時代の中期の大きなムラだった有東遺跡があってそこから分かれた。有東遺跡が母ムラで登呂遺跡は子ムラだということが言われました。その成果は正しくて、その後の調査でも有東遺跡が弥生中期の大きな集落遺跡で、弥生後期になって登呂遺跡が出てきたということが追認されてきました。

①登呂遺跡の盛衰と後期中頃の洪水

有東遺跡から登呂遺跡へ

（スライド10）これは登呂遺跡周辺の遺跡の様子を示した地図ですけれども、左側が中期で、水色で有東遺跡の集落の範囲が示してあります。有東遺跡は、弥生時代中期後半・Ⅳ期のころには大きな遺跡だったんですが、遺跡のムラの部分というのはその水色の部分しかなくて、周りに紺色で遺跡が示してありますけど、ほとんどお墓なんですね。右側に後期の様子が示してあります。今度は茶色で集落の部分が示してありますけれども、ムラの部分がかなりたくさん増えている。ですから有東が母ムラで、そこから登呂遺跡が分かれたんですけれども、分かれたのは登呂遺跡だけじゃなくて、いくつかのムラが分かれた。そんな状況がその後の調査でもわかってきています。

登呂ムラの成立

（スライド11）登呂ムラの成立です。弥生時代の集落というと丸く固まってひとところにあるように思われがちですけれども、登呂遺跡は調査が進んでいくと、北側に川が流れているのがわかってきて、どうもその自然堤防、川のへりに高まりがあるんですけれども、そのへりの高まりの上にずっとムラがつくられていたようです。ムラの形は地形に制約されて、川に沿って細長い居住域が広がっていたのが登呂遺跡ということになります。

登呂遺跡には後期の段階になって初めて人々が住み始めて、水田も恐らく一気に拓かれたと考えられています。中期には有東遺跡の周りだけで生活していたのが、後期にムラが分散的になって、水田域が各段に広くなったということが言えるということですね。

登呂遺跡の調査成果

（スライド12）登呂遺跡は、戦後間もない時期に調査されて、はじめて弥生時代の水田とムラが一体となって発見された遺跡として全国から注目されていました。ただ、吉野ケ里遺跡とか、池上曽根遺跡とか、全国にいろんな遺跡が見つかってきて、昭和の終わりごろになると、あまり真新しさがなくなってきたんですね。最初の調査から50年たったころ、1990年代ぐらい、これじゃいかんということになって、もう一回調査して、登呂遺跡の新しい姿を描きだしましょうということになりました。現在は、昭和の頃に有名だった登呂遺跡の姿と大きくリニューアルして、新しい博物館もできています。もし機会があったらぜひ来ていただきたいと思います。

1947年から50年ごろに、昭和の発掘調査が行われました。そのころから最期は洪水によって埋もれたムラという評価があったわけですけれども、当時の発掘では、こういう低地の発掘ですので、発掘していくと水がどんどんわいてくる。結果的に遺跡の面

に到達しても一番上のほうの部分しか正確には調査できなかったということがあるようです。

（スライド13）50年後、平成のころに発掘をしたんですけれども、発掘の方法もいろいろ新しくなって、強制的にポンプで排水ながら調査しているので、遺跡がこうあったというだけじゃなくて、何が同時にあったとか、地層の前後関係とか、そういうのもわかるようになったんですね。そうすると、ムラが始まったのも弥生時代後期だったというのがわかってきたし、ある一定の変遷をとげて、続いて、弥生時代後期の中ごろに洪水で埋没した。一時期ちょっと復興したけれども、すぐ、最終的には人がいなくなった。

もうひとつわかったのは、水田のことで、洪水の前の水田は普通の土盛りの畔でつくった水田なんですけれども、洪水のあとになると、水路とか畔を矢板で補強する。それは昭和の調査のときからわかっていたんですけれども、板で補強するのが始まったのは洪水のあとだったということが新たにわかった。ムラをつくったときから水田はあったけれども、洪水でこりたんですかね。洪水のあとにかなり水田を補強しているということがわかりました。一度史跡として整備されていた所を発掘するというのは、いろいろと困難があると思いますが、古津八幡山遺跡の調査もそうだろうと思います。

（スライド14）これは登呂遺跡の平成の発掘調査の報告書にあげてある図なんですが、左のほうから矢印の順に、ムラの中心部分がどういうふうに変遷したかということを示してあります。最初ムラがつくられてから、水路の位置なども変わってきているのがわかりました。平成の調査の１つの大きな成果は、後半の時期になると、ムラの真ん中に昭和の調査でわからなかった大きな建物が１棟あったということがわかってきました。それはほかの倉庫とかとは違う独立棟持柱を持った大型の建物で、お祭りのための建物、つまり「祭殿」と考えられています。そうした変遷があって、最後の段階で洪水に埋もれる。そのあと少し復興した様子もわかってきたんですが、ムラの部分は放棄されて、一方、水田は補強されて継続していく。調査された方が熱心に整理をされて、そういった７段階の変遷があったことがわかってきたわけです。

登呂遺跡全体では、大きな位置関係としては、川に沿って微高地の上にムラがあって、その南側にやはりかなり広い水田がある。静岡平野では、登呂遺跡の昭和の調査以降いろいろな発掘が続けられて、かなりの水田があるというのがわかってきましたが、弥生時代中期の間は、水田がなかなか見つからないんですね。水田をつくる方法が後期に大きく変わるということがあるんですけれども、後期の登呂遺跡の段階になると急に広い水田がつくられるようになる。そんなこともわかってきました。

（スライド16）これはドローンで撮影した写真ですが、登呂遺跡は今こんな状況になっています。昭和のころの整備では北のほうにムラが再現され、ちょっと離れた南側に水田が復元されていて、間が森になっていたんですね。それは弥生時代当時の景観とはかなり違っていました。平成の調査で、ムラと水田の間を水路で区画をして、その南側に水田が広がるという状況がわかってきました。最初にお話しした私たちの田んぼはムラの真ん前のこの辺で、ちゃんと草取りをしなくて草ボーボーになっている所がありますね。管理をしなかったらどうなるか実験してみようと。復元されたムラと水田は、集落のおわりの頃の姿をかなり正確に再現しているということになります。

鉄の普及がもたらした変化

（スライド17）ほかの遺跡の調査などからもわかってきたことですが、登呂遺跡が急速にこの水田域を広げたということの背景には、これも全国的に言われるようになったことですけれども、東日本で特に弥生時代の中期と後期の間で、鉄の普及率というのが大きく変わったことが考えられています。弥生時代の中期までは石器、特に石の斧がたくさんあったのが、後期に急になくなる。登呂でも鉄そのものはなかなか出てこないのですが、石器が極端に減少します。鉄が出ないのは埋没環境に問題があると言われていますが、同じ静岡の川合遺跡など、いくつかの遺跡では鉄の道具もかなり見つかっています。そうするとやはり鉄が普及して、それによって木材加工とかいろんな資源活用というのが大きく変わるわけですし、それで石器を集中的に生産して道具をつくるということからもある程度解放されるわけです。有東遺跡のように中期まで大きなムラをつくったというのは、石器や木器を集中生産しなきゃいけなかったというようなことがどうもあるんじゃないかと思いますが、後期になると、鉄器の普及で生産も分散的にできるようになって、広い範囲で開発が可能になった。そんなことが考えられるんじゃないか。

鉄が結局登呂のムラの発展に大きく影響を与えたと考えられるのですが、この背景には、土器の系統関係を考えてもそうだと思うのですが、静岡と中部高地を経た北陸・日本海側との関係があるのだと思います。実は登呂式土器は、中部高地と非常に関係がある。赤く塗る櫛描文の土器なんですね。そのことからも、中部高地を経由して鉄がもたらされたということは考えられるのですけれども、恐らくその先には北陸、日本海側があって、そこから入ってきた鉄が登呂に伝えられたということになるんじゃないかと思います。

「祭殿」の祭りと農業共同体

（スライド18）それから、先ほど「祭殿」といった建物のそばに、水路から水を引いて、水溜めをつくったような場所があって、そこからはいろいろな祭祀的な道具が出てきました。お墓ではなく、ムラの中で銅製の腕輪が見つかるということは、なかなかないんですけれど、登呂ではそれ結構たくさん見つかっていて、ほかにも鹿の肩甲骨で占いをするト骨。木製の剣や刀、これらは実用品ではないんですけれども、たくさん出てくるというのは、それを使っておまつりをやったのだろう。その「祭殿」の周りでは、人がたくさん集まってやるようなおまつりがあった、そんなことが考えられています。

（スライド19）登呂は有東の集落から分かれたということですが、有東から分かれたムラはやはり登呂だけじゃなくていくつかあるのは先ほど示したとおりです。それと同時に、水田域が飛躍的に広がったということですね。それぞれのムラがどのぐらい、どういう範囲で水田を持っていたか。この図にはその可能性がある範囲を示したのですが、もしかしたらムラとムラの間で連続していたかもしれない。それぞれムラはわかれていてもお互い協力しながら水田を経営していたということが言えるかと思います。そういうムラとムラのつながりを、結束をかためていくのが、登呂の「祭殿」でのおまつりだったというようなことも言えるんじゃないかと。この農耕社会の結合の様子が、登呂が成立してから洪水までの間というのは、特に言えるんじゃないかと思います。

洪水のあとも水田域はこのまま続いていくので、恐らくこういった集落間の関係というのが、続いているんだと思います。ただ登呂ムラはなくなるわけですけれども、北側の鷹ノ道遺跡とかに一部ムラが残っています。また、そのころ日本平丘陵の縁、静岡大学もこの辺にあるのですが、その周りに新しくムラが急に出てきます。洪水で低地の登呂ムラが埋もれて、そこを離れるわけですけれども、それがちょうど静大の建っている丘陵の裾野に移ったと考えると、非常に整合的なんですね。恐らくそうなんじゃないかなというふうに思っております。

（スライド20）この図はそのころの静岡平野の様子をまとめたものですけれども、登呂の周辺だけじゃなくて、いくつかの地域でそういった水田の開発が進む。恐らくそれぞれのムラもまた後期の中ごろの洪水を被っているのですけれども、静岡平野の各地で一生懸命水田の畔などを矢板で補強して、また同じ所に水田を拓き直している。そのまま使えた所もあるでしょうけれども。そんな状況があります。

中塚さんの話では、恐らく後期の真ん中ぐらい以降、干ばつがあったり、またしばらくして洪水があったりとか、大変な時代が続いたとされています。静岡では、洪水の後、ムラは移動しながらも、水田をもう一回補強するとか、いろんな工夫をして、とにかく水田を死守しながら生活を続けていた。静岡の人たちはとにかく水田を守っていくことで、この混乱の時代を何とかしのいだ。そういうことかなと思っています。

②愛鷹山の高位置集落

次は駿河湾の東側。富士山の裾野の駿河湾岸に愛鷹山という山があります。その麓の浮島沼と呼ばれる低地周辺の話です（スライド21）。この辺は弥生中期からのつながりがよくわからなくて、後期が始まって少ししてから、低地にやはり登呂のような集落がたくさん出てきます。ただ、後期の後半になってくると、足高尾上遺跡群と書いてありますが、愛鷹山の山裾、標高が80メートルから180メートルぐらいまで、東西約２キロ位の範囲にムラが固まって展開しているのがわかります。

（スライド22）この表は、この丘陵のムラと平地のムラとの関係を整理したものです。下のほうに低地のムラがまとまっていて、さきほどの足高尾上遺跡群の標高の高い所に固まった遺跡が上のほうに示してあります。後期の前半ごろに低いところにムラが現れて、一部は早い時期から上がり始めていますけれども、やっぱり後期の真ん中ぐらい、登呂遺跡の洪水の時期からあとぐらいに、標高の高い所にムラが形成されていったというのがわかります。

（スライド23）これは、足高尾上遺跡群の様子を示した図です。結構傾斜のきつい丘陵部で、谷が縦に

入って地形を分けているんですけれども、それぞれの尾根上にムラが広がっています。この集落の中には、集落の上のほうと下のほうに尾根を横切るように環壕と同じような断面V字形の溝が掘られていて、集落域を区画しています。だからある意味では環壕集落といえるんですね。一番北のほうにかなり大きな溝が、集落域を区画するように掘られているんですが、その溝の中には大きな、深さが2メートルぐらいの穴がボコボコいくつもあいているのが見つかっています。それは明らかに落とし穴なんですが、そこ以上上のほうに行くと地形あがっていくだけなので、そちら側から人が攻めてくるということはないように思います。多分この落とし穴に引っ掛かるのはイノシシとか、害獣のたぐいになるんでしょう。ですから、北側の溝は、必ずしもムラを敵対する集団から守るということではなくて、ムラの中には実は畑のあとなんかもたくさん見つかっていて、住居がさかんにつくりかえられているんですけれども。ここでの生活を害獣などから守って安定させるための溝ということも言えるかもしれません。この中には住居跡が何百軒も見つかっていますので、とにかく人が安定的に暮らしていたのは間違いない。洪水から逃れるために上に移ったとしても、なぜこんな高い所に行かないといけないのかとか、いろんな謎は残っています。登呂の周辺とはまた違った集落の動きというのがここにはあったということです。

③菊川式土器の関東地方への移動と環濠集落

弥生後期の地域色

登呂の位置する静岡平野では扇状地の地形が弥生の水田をつくるのに良い条件だったといいました。一方、静岡、太平洋側の東海の東部から関東にかけては、扇状地だけではないいろいろな地形が広がっていて、そこにまたいろいろな弥生遺跡があります。土地の様子にも地域差があって、いろいろな集団関係があったことがわかってきています。

その様子はかなり複雑です。この図(スライド24)は東海の東部、静岡から関東の辺りのそうした状況を土器の様子からまとめたものです。『赤い土器の世界』という登呂博物館の展示図録で作ったものですが、登呂式土器の壺を赤く塗るというのはどうも信州方面の影響のようです。信州の弥生土器はずっと赤く塗っているのですが、その影響が直接登呂には来ている。けれども、その周りには、またちょっと違った土器があって、先ほどの愛鷹山の辺りには雌鹿塚式土器。登呂の西側に行くと菊川式土器が分布する地域があります。菊川式土器の地域、菊川市や掛川市の辺りの低地部は大きな河川はなくて、土砂の流入が少ない。低地部はかなり平らなんですね。弥生時代には米をつくっているのは間違いないのですが大規模に水田を広げていくような環境ではなかったようです。最近レプリカ法といって、土器の粘土の中にどういう穀物が入っていたかを調べる方法があります。私たちもその調査をやっていますが、登呂遺跡の土器からはコメしか出ないんですけれども、この菊川式の地域でそれをやってみたところ、米以外にもアワ、キビなどの雑穀が出てきました。そんな結果もあります。

菊川式土器とその移動

(スライド25) 菊川式土器を使った人たちは、どうも登呂のように広い水田を開いて、それをずっと管理していくような生活というよりも、小規模な水田や畑作とか、そのほか山林をいろいろ活用していくような、そういう生活をしていたのではないか。登呂は水田に固執しなければいけなかったのかもしれませんが、逆に菊川式土器を使った人たちは、いろんな所に結構流動的に位置を変えながらムラをつくっていく。登呂の人たちはずっと動かないんですけれども、この菊川式土器の人たちは、いろんな所に移動していたのがわかっています。30年以上前から、この菊川式土器と同じ形の土器が、関東地方で出土することが注目されてきました。そして、あとからわかってきたのですが、菊川式土器が移動した遺跡というのは、環濠集落である場合が多いのです。

30年ほど前ですが、東京の早稲田大学の校地内で発掘が行われて、環壕集落が出てきました。下戸塚遺跡といって右側の写真がそうです。平らに見えますが、さらに右側のほうが谷になっていて台地の縁につくられた環濠集落です。ここでも、静岡西部の菊川式土器とよく似た土器がたくさん出てきました。そんなムラが関東地方にいくつもあるというのがわかってきます(スライド26)。早稲田の下戸塚遺跡というのは13番、上の点線で囲ってある所ですね。ここでは菊川式土器がたくさん出てくるのですが、一緒にこの東京湾内のオレンジで囲ってある範囲に分布する久ヶ原式土器というのも一緒に出てきます。

ですから静岡から移動していって、ムラをつくるわけですけれども、そこはもともと人がいなくなっているような場所だったようですね。そこに移動し

ていくのだけれども、住んでしばらく生活する間に、やっぱり近隣の人たちも一緒に暮らすようになる。ですから移動した当初は環濠集落で緊張状態があったのだと思うんですが、結局はやはりムラとして暮らしていく。それで、その近隣の人たちとも交流関係とか協力関係がある、そんなことではないかと思います。

土器の図がたくさん並んでいますけれども（スライド27）、左寄りが菊川式土器、壺も特徴がありますが、ハケ調整の甕を使っている。右寄りが久ヶ原式土器、壺は赤く塗る土器で、ハケ調整じゃなくて輪積みの甕があったりします。それらが一緒に出てきている。菊川式土器のほうが多いから、やはりもとは移動してきたということでしょうね。

時期的には、まだ登呂が洪水に埋もれる前から移動してきているというのがわかっていますが、登呂の洪水で埋もれたあとも、かなり人がまとまって移動しているというのもわかってきています。こちらの土器は（スライド28）登呂の洪水の直後ぐらいかと思います。何かその辺の時期で盛んに移動していって、移動した先で環濠集落をつくる。そんな人の動き、地域社会の動きがあったようです。

このようなことで、登呂の洪水のあとから今お話しした辺りが古津八幡山遺跡の時期と同じくらいの間の話だろうと思います。登呂のムラで水田が開かれていたのが、洪水をきっかけに、人の動き集落の動きというのがはじまった。菊川式の移動というのも同じころに行われた。古津八幡山遺跡に高地性の環濠集落がつくられていたころです。

④高尾山古墳の出現と北陸北東部系土器

高尾山古墳

静岡の最後の話ですけれども（スライド29）、最初にお話ししたように静岡では高尾山古墳が古墳の出現に関して話題になっています。右側の駿河湾の地図で右側のほう２番の前方後方墳です。左側に古墳の編年表がありますが、もちろん高尾山古墳は一番上のほうですね。私が静岡大学に赴任したころだったのですが、当時いらっしゃった滝沢誠先生と神明山１号墳という古墳を調査しました。それが高尾山古墳の次の位置にある古墳。その次の神明塚古墳も静岡大学で調査をしてこの時期だということがわかりました。当時は静岡には古い古墳はなくて、本格的な古墳の出現は東日本では遅れると考えられていたましたが、静大で古墳を調査すると、みんな古くなるといわれました。調査したから古くなったわけではないのですが、そういうことでいろいろ古い古墳が見つかるようになりました。

さて高尾山古墳です（スライド30）。平成17年、道路計画で壊されることになって発掘調査が行われた古墳ですが、写真の四角い部分だけ最初わかっていて、その上に神社が建っていました。解体して発掘をしてみたら、長い前方部があるのがわかってきて、62メートルもある古墳だということになりました。周溝などからは土器がたくさん出てくるのですが、常識的に考えるとその規模の古墳が作られる時期よりもその土器がとても古いということで、注目を集めて話題になりました。

それでまた邪馬台国時代の話になっていきます（スライド31）。いろいろな研究者の評価にもとづいて、沼津市はこの古墳の年代をわかりやすいように実年代で西暦230年ぐらいとしました。卑弥呼が亡くなるちょっと前頃ということになります。左側はこの古墳の埋葬施設の写真ですけれども、鏡などの副葬品があって、上のほうに細長い鉄製品が見えますが、大きな槍が入っていました。邪馬台国時代の卑弥呼のころの、この地域のトップの人物だっただろうということになるわけですが、卑弥呼を実際知っていたような、そういう人物じゃないか。スルガの国の最初の「槍の王」というのが、この古墳の主のキャッチフレーズということになっています。

北陸系土器

邪馬台国の時代、卑弥呼のころになると、静岡にもそういう人物が出てきて、この古墳、研究者によっては古墳と言わないような古い墳丘墓、に葬られた。新潟との関係で注目しておきたいのは、新潟ではこのころ、いろんな地域との交流が始まるという話でしたが、この古墳からもいろんな地域の土器が出てきています。右側に写真がありますが、１から３は伊勢湾岸の形の土器で１は高坏、２はＳ字甕と呼ばれる甕、３は器台で、この時期以降に広く分布します。４は甕なのですが、台が付いている。台が付くのは東海地域の特徴ですが、この４の甕の胴部の上のほうの特徴ですね。これが北陸北東部系の土器に似ている。「千種甕」と言っているような土器の特徴を示しています。台が付いているからそのものではないし、新潟でつくった土器がそのまま持ち込まれたものではない。逆に上部の特徴が、北陸北東部の特徴を持っているということは、おそらく静岡の人がつくったものでもないということですね。そういう特徴を、真似してできるものではないと思うので。

どうもやはり新潟から人が来て、何でこんなものをつくらなきゃいけなかったかというのは謎ですが、そういう人の交流があったんだということでしょう。

いろんな遺物が出ていて（スライド32)、その４の土器１個じゃなくて、新潟辺りの特徴をもつ甕形土器も何点かあるということですね。この真ん中辺りは東海西部系の土器。そういう様相は新潟の古墳初頭あたりの土器の様相とも似ている状況があったと。右側の上のほうの真ん中は「槍の王」の槍ですね。

静岡の古墳時代への転換

最後にこの頃、登呂の静岡はどうなったのか（スライド33)。高尾山古墳と同じころ、静岡の様相も変わってきています。登呂遺跡の南側500メートルぐらいの所にある汐入遺跡という遺跡ですが、登呂遺跡と違っているのは、ムラが直線的な溝で囲まれているんですね。その中の一画で、右下のほうの写真にある、登呂遺跡の祭殿と同じような建物が見つかっていますが、これには池が付随していて、水場のおまつりがここで行われたと考えられています。登呂遺跡と違うのは、その周りを溝で囲んで、さらに塀があるようです。ほかの区画でも大型の建物などが溝や塀などで囲まれている。それはやはりそれぞれの区画が何か機能を持っていてそれが集合的にあるので、登呂の一般的な人たちが集まったムラとだいぶ違う、何か政治的な構造を持ったムラということになると思います。古墳時代になって首長の居宅・居館というのが出てくると言われていますが、早くもそういったものがここにあったと言えるんだろうと。祭祀の空間、人々を惹きつけるような、登呂ではそういう空間だったものが首長に占有されるような、そんな集落社会だったことが言えるんじゃないでしょうか。

（スライド34)高尾山古墳からそれほど時期は経っていない、３世紀の後半ぐらいの時期だと思うんですが、静大で調査した神明山１号墳という古墳ですね。これも土器がかなり古いというので話題になったのですが、それよりも。全長が70メートルぐらいの前方後円墳だということがわかったんですが、その形をよくよく検討していって、やっぱり例の箸墓古墳とあわせてみるかという話になりました。するとぴったり合ってしまった。箸墓古墳は全長280メートルぐらいですね。ちょうどその４分１にしたときに、ほとんど規格がぴったりと合うということがわかりました。時期もおそらく３世紀の後半ぐらいに収まるんじゃないか。そんなものが静岡にもこの時期につくられていたんだということがわかっています。登呂遺跡の洪水以降、何か混乱した時期があったけれども、古墳時代、そういう段階が早くも来た。静岡ではそういうことがわかってきたということです。

３．東海からみた邪馬台国時代の新潟

（スライド35）静岡の話、少し駆け足になりましたが。静大にも、新潟とか北陸から来る学生さんがいますが、意外と静岡の地理が落ち着くというんですね。能登半島と比べてですが、静岡の伊豆半島が突き出て湾になった地形というのはすごくなじみがあるといった人もいます。冬場は、静岡から焼津のほうに蜃気楼が見えたり。そういった地形的な共通性もないわけではない。東日本と西日本の、北日本も含めてですが、「接点」という似た特徴もある。邪馬台国の時代にも、古津八幡山遺跡で高地性集落、環濠集落が形成される。関係は薄いように最初は思っていましたが、特に登呂が洪水で埋もれて以降の時期、やはり共通するような点がいろいろあるなと、今回思いました。

①高地性・環濠集落―倭国乱の頃

静岡では、登呂遺跡も洪水の後、静大の近くの高台に移った。愛鷹山の周辺では、非常に高い位置に集落が形成される。その前後の時期、菊川式土器を使った人たちは、関東地方へ移動して環濠集落をつくった。新潟でわかっている「倭国乱」の混乱の時期、太平洋側でもいろんな動きがあった。環濠集落をつくるというのは、緊張状態を示しているのだと思いますが、人が集団で移動するということとも関係していて、その初期に環濠集落をつくる。その移動先で、周辺の集団との関係があることもわかります。これは天王山式と新潟の関係というのとも、似ているのではないかと思います。

静岡平野も混乱の時代であったと思いますが、水田を必死に守りながら生き抜いた。また違った開発の戦略を持っていた菊川式の人たちは、別の新天地を求めて移動した。逆に登呂の人たちはそれができなかったのかもしれない。「倭国乱」はそういう政治的な、物語に出てくる話。それも当然一面なんでしょうけど、背景として各地にいろいろなことがあったと考えられるかなと思います。

②新潟から来た人々

高尾山古墳で新潟の土器とよく似た土器が出土した、恐らく新潟から来た人がいたんだという話をしましたが、最初にお話ししたルートを通って来たのかもしれません(スライド36)。新潟の話ということで、個人的に気になっていたことを最後にお話しさせていただきます。最初の地図の千葉県の所に国府関遺跡という遺跡の点を落としてあります。学生のころ、この遺跡の発掘に参加していたのですが、そこから古墳初頭ぐらいの土器がたくさん出てきました。その中に、底部が尖った甕形土器がかなりの量あって、結局これが北陸北東部系の土器だったということになるのですが。出土した土器全体の中で、３分の１近くこういう土器がありました（スライド37)。

房総半島のこの遺跡のちょうど西側に国分寺台遺跡群という、やはり全国との交流を示すような有名な遺跡があって、北陸系土器も出ていますが、そこの北陸系土器とも少し違う。この国府関遺跡から出ている北陸系の土器は、新潟の土器に近いんじゃないかと思います。高尾山古墳の新潟系の土器は、台を付けなきゃいけなかったんですけれども、国府関遺跡では、一緒に東海系の台が付いた甕形土器もたくさん出てくるのですが、その台はわざわざ打ち割って取り除かれている。だからここでは新潟の流儀に合わせてあるのではないか。

国府関遺跡は、木製品を専業的につくった遺跡ですが、少し唐突かもしれませんが、新潟の人がわざわざここに来たのは、その木製品の製作に何か技術的に貢献したのではないか。そういった技術的に進んだ人たちが生活していたので、東海の土器の使い方がおかしいと言って、台を取り除いたということがあるかもしれません。古墳時代の始まり頃に広域に土器が動くということは、それに商品価値があるからという議論もあります。しかしつくられた土器を見ると人が動いているのも確かです。古墳がつくられるということもそうかもしれませんが、いろんな技術が政治的に、交渉・交流をもつ。そういったことを背景として動いている土器というのもあるのではないかなと、そういうふうに思っています。ですから高尾山古墳に来た新潟の人も、何か特別な意志と技術を持っていたのかもしれないなと思います。

まとめ

（スライド38)「邪馬台国」の時代、新潟の特徴的な高地性集落・環濠集落が発達する時期と東海・静岡とを比較してみました。環境変動など背景はいろいろあったと思われますが、そのような状況を生き抜こうと抗ったというのは新潟の集落も静岡の集落も同じなのかなと思います。文献には「倭国乱」･戦乱の時代と記されるわけですが、一方で交流と開発が進展した時代とも言えるのではないでしょうか。

次に訪れる「卑弥呼」の時代､高尾山古墳の時代。広範囲に交流が起こる時代ですけれども、その前にも移動を伴って地域社会の隙間を埋めていくような動きがあって、その上で政治的な関係性が出来上がっていった。そういう政治的な関係と結びつく先進的・基盤的な技術の交流ということもあって、人も盛んに動いているんじゃないかと思います。新潟では「玉つくり」があって、そういう技術の交流というのも、広域の交流の背景に考えられるかと思います。

長時間になりましたが、これで今日の話を終わります。ご清聴ありがとうございました。

古津八幡山遺跡（新潟市）

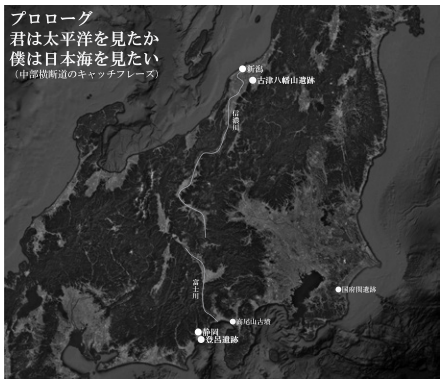
新潟県埋蔵文化財センター・史跡古津八幡山弥生の丘展示館
令和3年度企画展「倭国大乱から律令国家成立までの越後平野」
講演会　令和3年10月17日

東海からみた邪馬台国時代の新潟
～登呂の洪水以後の東日本～

登呂遺跡（静岡市）

静岡大学人文社会科学部
篠原　和大

スライド１



スライド２

今日の話の内容

1．邪馬台国時代の新潟と東海（静岡）
- 弥生時代後期から古墳時代初頭（1世紀から３世紀）の邪馬台国の時代
  新潟と東海（静岡）で何が起こっていたのか。

2．邪馬台国時代の東海～静岡を中心に～
- 静岡とその周辺の邪馬台国時代の遺跡の動向をたどり、その特徴をつかむ。

①登呂遺跡の盛衰と後期中頃の洪水

②愛鷹山の高位置集落

③菊川式土器の関東地方への移動と環濠集落

④高尾山古墳の出現と北陸北東部系土器

3．東海からみた邪馬台国時代の新潟
- 新潟と東海の邪馬台国時代の同じころ、環濠集落と異系統土器の共存、高位置集落、古墳時代初頭の広域移動など同時期に類似、関係するような動きが認められる。

①高地性・環濠集落―倭国乱の頃

②新潟から来た人々

まとめ

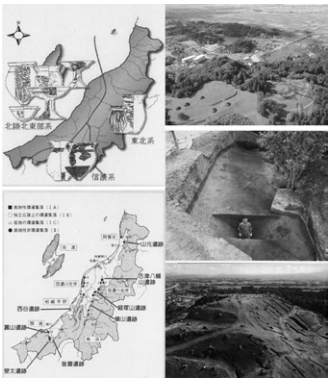
スライド３

1．邪馬台国時代の新潟と東海（静岡）

時期区分				近畿	北陸	新潟		駿河湾		静岡		愛知
弥生時代	中期									有東		高蔵
												八王子
	後期	前半		V	猫橋							古宮
			邪馬台国時代					登呂遺跡	菊川式・山中式の移動（1）	登呂	離底塚（前）	山中
					法仏	八幡山遺跡	裏山遺跡					
						東北系・北陸北東部系土器	柴太遺跡	登呂の洪水	菊川式の移動（2）			
		後半		庄内	月影	（高地性・環濠集落）邪馬台国の時代			足高・尾上遺跡群（高位置集落）	飯田	離底塚（後）	巡間Ⅰ
	終末	終末・草墳			白江	他地域土器の流入 東北系土器激減		汐入居館	高尾山古墳	（汐入）	大廟Ⅰ 大廟Ⅱ	巡間Ⅱ
古墳時代	前期	前半		布留	古府クルビ			神明山1号墳		（小黒）	大廟Ⅲ	廻間Ⅲ
		後半										
	中期					古津八幡山古墳						

◎新潟で古津八幡山遺跡などの邪馬台国時代の緊張関係を示す高地性・環濠集落が営まれているころ、列島太平洋岸の東海ではどのような状況があったのか。大規模な水田を営んだ登呂遺跡が洪水による終焉を迎え高位置への集落の移動や遠隔地へ環濠集落を形成した移動が行われるなどやはり激動の様相が認められる。

スライド４



倭国大乱の頃の新潟

古津八幡山遺跡、裏山遺跡
柴太遺跡などの高地性の
環濠集落が形成されるように
なる（緊張状態）。

北陸北東部系、東北系土器
が共存し、折衷土器。

後期の終わりごろまでに
環濠埋没

◇令和3年度秋季企画展「倭国大乱から律令国家成立までの越後平野」展示図録
◇甘粕健編『越後裏山遺跡と倭国大乱』

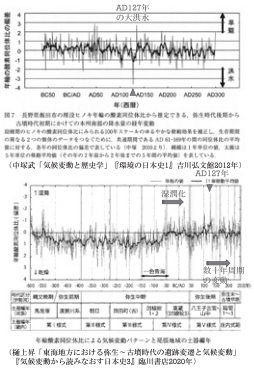
スライド５

◇令和3年度秋季企画展「倭国大乱から律令国家成立までの越後平野」展示図録

邪馬台国・卑弥呼の頃の新潟

北陸北東部系の土器が主体に。畿内・北陸南西部系土器が遠隔地から移入。
列島的な遠隔地土器の広域移動の時代

スライド６



（中塚武「気候変動と歴史学」『環境の日本史1』吉川弘文館2012年）

年輪酸素同位体比による気候変動パターンと縄文海進との対比

（碓上昇「東海地方における弥生～古墳時代の遺跡変遷と気候変動」『気候変動から読みなおす日本史3』臨川書店2020年）

登呂の洪水はAD127年か!?

樹木年輪の酸素同位体比から推定される降水量の変動のデータから、中塚武氏は、紀元2世紀には数十年周期の気候変動が起きた時期であることを指摘し、「倭国大乱のような動乱を生じさせるもっとも危険な気候変動だったといえるかもしれない」とした（中塚2012など）。

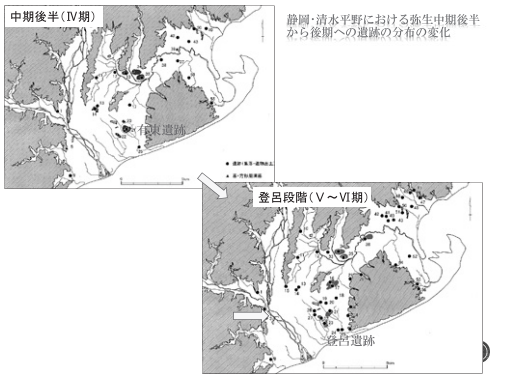
その始まり頃のAD127年には極端に降水量が多かった年が推定され、赤塚次郎氏はこれを境に東海の地域社会は古墳時代へと舵を切り、廻間様式が誕生したとしている（赤塚次郎「環境変動と東海地域『狗奴国』の原像」『邪馬台国』菅原社2015年）。

登呂遺跡の集落を埋没させた後期中頃の洪水もAD127年のことであった可能性が考えられる。

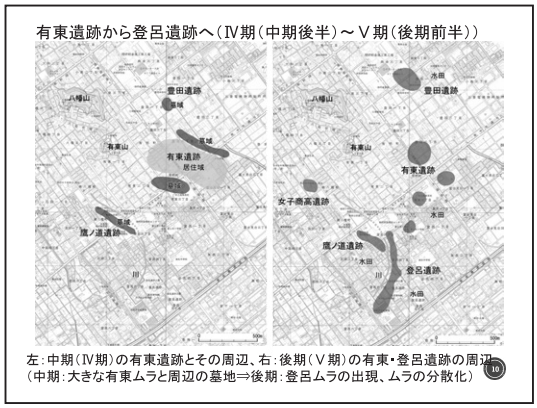
ただし、最近弥生時代のさらに長期的なデータが公開され、中期末頃からの湿潤化が注目される一方、土器編年との整合関係もやや異なった意見が出されている（碓上2020など）。

スライド７

スライド８

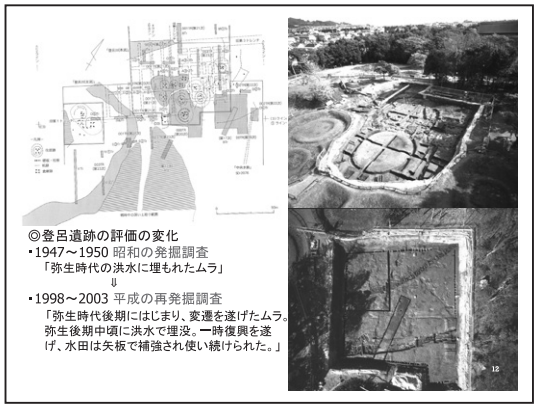


スライド 9



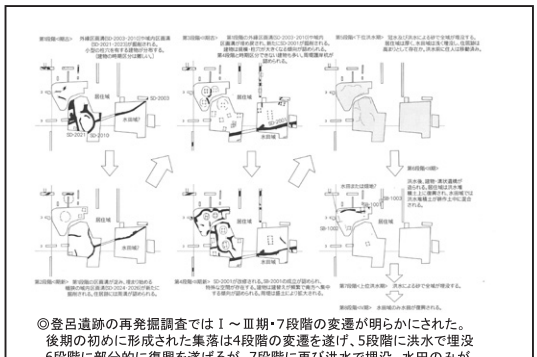
スライド10

スライド11



スライド12

スライド13



スライド14

スライド15

スライド16

登呂遺跡の形成と地域社会（Ⅴ期）

鉄の普及がもたらした変化

・大量の木製品・木器が出土

・木器加工用の磨製石斧はごくわずかしか出土しておらず、それを製作した痕跡もない

・木材の伐採や加工には、その加工痕跡からも鉄斧が使われるようになったのだと考えられる

⇒鉄器の普及

・磨製石斧を作り続ける作業（有東）から解放された。
・木の伐採加工や木器の製作の効率は飛躍的に向上。村の中で集約的作業は大幅に減り、労働力を開発や生産向けることが可能になった。

⇒有東の大きな村が解体縮小し、登呂のような広い水田を拓いた村が一気に作られた。

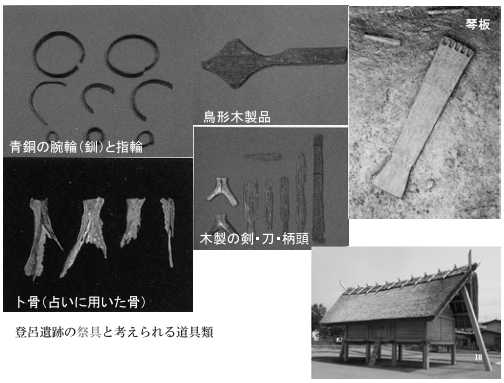
⇒鉄資源は静岡の立地や登呂式土器の系譜関係からも日本海側から中部高地を経てもたらされた可能性が高い

鉄器で加工された登呂の木製品

川合遺跡の鉄斧

17

スライド17

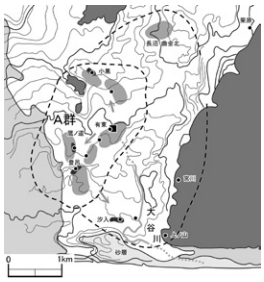


登呂遺跡の祭具と考えられる道具類

18

スライド18

登呂遺跡の形成と地域社会（Ⅴ期）



静岡平野南部の弥生遺跡群の展開

登呂と静岡平野南部の農業共同体

登呂遺跡の祭殿を中心とした集団的な祭祀が復元できる。
　登呂に祭殿ができるのは、遺跡の変遷の後半段階。祭祀に集った人々はより広範囲の集団と推定できる。有東遺跡から分かれた集落集団の農業共同体有的結合を推定。

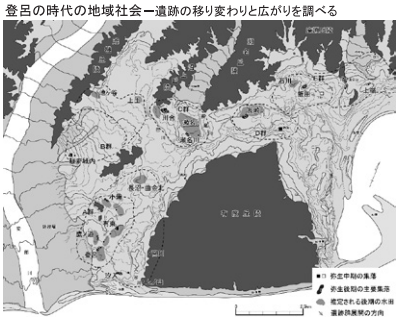
登呂の復元水田（現在）

◎登呂は後期中頃の洪水で埋没し、居住域は消滅する。すべての遺跡が低地から姿を消すわけではないが、代わるように有度山麓に宮川、上ノ山などの集落が現れる。

19

スライド19

登呂の時代の地域社会ー遺跡の移り変わりと広がりを調べる



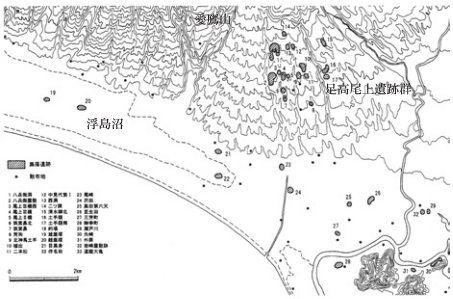
鉄器の普及、弥生後期にかけての環境の悪化が農耕への依存を強める方向に向かわせた？後期には 静岡平野の各地で広大な水田を切り開く動きが認められる。（篠原2008「静岡清水平野における弥生遺跡の分布と展開」『静岡県考古学研究』40を改変）

20

スライド20

②愛鷹山の高位置集落

駿河湾東岸地域の弥生後期集落の動向



愛鷹山南麓周辺の弥生時代後期遺跡分布図
（小泉裕紀2002「愛鷹山南麓周辺における弥生集落の動態」『弥生集落論』第5回中部弥生時代研究会）

21

スライド21

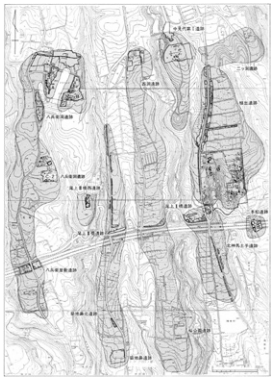
	遺跡名	立地	時期					居住構造		備考
			前半（古）	前半（新）	後半（古）	後半（新）	古墳初	居住域	墓域	
1	八兵衛洞	丘陵上						○		
2	八兵衛洞第	丘陵上						○		
3	尾上谷横穴	丘陵上						○	○	
4	尾上宮殿	丘陵上						○		（未報告）
5	尾上土橋	丘陵上						○		
6	鷲塚桑石	丘陵上						○		
7	鷲塚桑	丘陵上						○		
8	宮殿	丘陵上						○	○	（未報告）
9	北神馬土塁	丘陵上						○	○	
10	幅田	丘陵上						○	○	
11	二本松	丘陵上						○	○	
12	中原円墳	丘陵上						○	○	
13	二子塚	丘陵上								土坑のみ
14	雨崎	丘陵上						○	○	（未報告）
15	横木柳沢	丘陵上						○	○	
16	土手橋	丘陵上						○		（未報告）
17	土手橋南	丘陵上							○	
18	折畳	丘陵上						○		
19	鷲塚城	独点地								土坑墓
20	城間城	独点地								
21	百間城	台地末端						○	○	
22	浮名田	低湿地						○		
23	荒崎	微高地						○		
24	沢田	微高地						○		
25	高田第六天	微高地						○		縁辺不明
26	宮元田	独点地						○		
27	二宮町	台地縁辺						○		（未報告）
28	御殿町	独点地						○		
29	瀬戸川	開区地						○	○	
30	矢幅	則沢段丘上						○		
31	角波	台地縁辺								縁・土坑
32	田崎屋敷	開区地						○		縁辺不明
33	浜崎元島	開区地								縁辺不明

愛鷹山南麓周辺の集落遺跡消長表

◎後期前半に低地周辺（浮島沼周辺など）に位置した集落は後期後半に高位置に形成されるようになる。、足高尾上遺跡群は周辺に同様の緩斜面が広がるにも関わらず、標高80m から180m 付近、東西2 kmのごく限られた範囲に集落が密集する。

22

スライド22



愛鷹山山麓の大集落

（後期後半：足高尾上遺跡群）

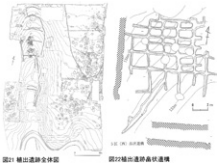
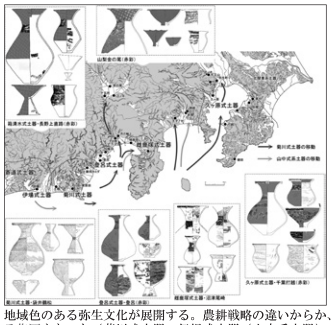


図21 植出遺跡全体図　図22植出遺跡高研遺構

23

スライド23

③菊川式土器の関東地方への移動と環濠集落



弥生後期の地域色と土器の移動（人の移動）

東京湾岸・房総半島に久ヶ原式が、駿河湾東岸に雌鹿塚式、静岡清水平野に有東式に後続する登呂式土器が、天竜川以東のおそらく志太平野も含む東遠江地域に白岩式に後続する菊川式土器がそれぞれ特徴の異なる後期前半の土器型式として形成された登呂式土器の櫛描文や赤彩の流行は中部高地の影響とみてよいだろう。

⇒この時期に地域色がはっきりしてくることは、自集団と他集団を明確に意識し始めたようにも見える。

地域色のある弥生文化が展開する。農耕戦略の違いからか、新天地をもとめて移動する集団もあった（菊川式土器、伊場式土器（山中系土器）の移動）。

（篠原和大2012「登呂の時代の駿河と赤彩土器」『赤い土器の世界』）

24

スライド24

◎南関東地方への菊川式土器の移動

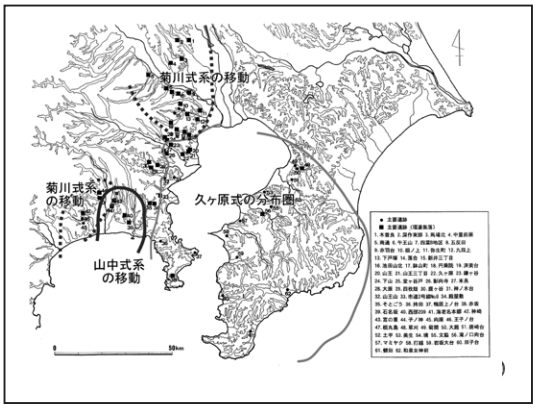
中部太平洋岸地域の弥生後期の土器の移動（『藤枝市史通史編上』（藤枝市2010）より転載）

下戸塚遺跡の環濠集落

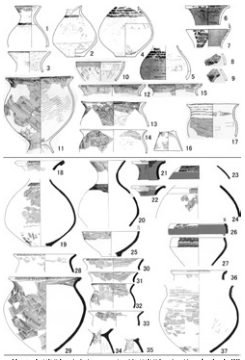
埼玉県和光市午王堂山遺跡・花ノ木遺跡、東京都下戸塚遺跡など東京湾北西岸域で、菊川式土器がまとまって出土することが知られる。これらの集落の多くは環濠集落で、周辺地域の在来的な土器（久ヶ原式）を含んで、変容が進んだ菊川式土器が共存する。人が集団で移動して定住したことを示す。

25

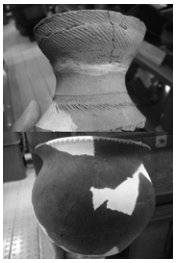
スライド25



スライド26



花ノ木遺跡（上）・下戸塚遺跡（下）出土土器



菊川式土器の技術的特徴を備えた壺・甕ほかの器種、久ケ原式の特徴を備えた各器種が共伴し、折衷的な土器もみられる。

27

スライド27

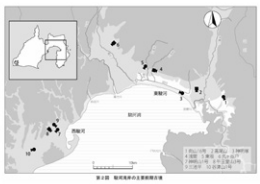
東京都西台後藤田遺跡

後期後半の当初頃（登呂の洪水直後頃からか）、再び菊川式土器の新しい時期の特徴を備えた土器群が武蔵野台地東部周辺に移動する。

28

スライド28

④高尾山古墳の出現と北陸北東部系土器



29

スライド29

高尾山古墳（沼津市）：平成17年からの計画道路建設のための調査で、はじめて3世紀前半代とみられる全長62mの前方後方墳であることが明らかになった。保存運動と協議の結果、道路計画を一部変更して保存されることとなった。

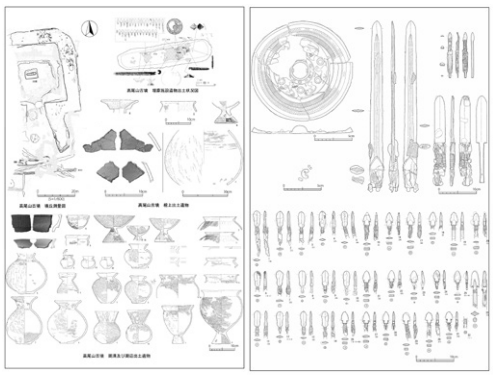
30

スライド30

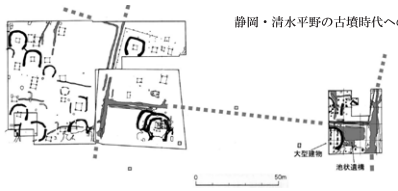
高尾山古墳の外来系土器：4は脚台がついているが、胴部から上位は北陸北東部の特徴を持ったものと考えられている。

31

スライド31



スライド32

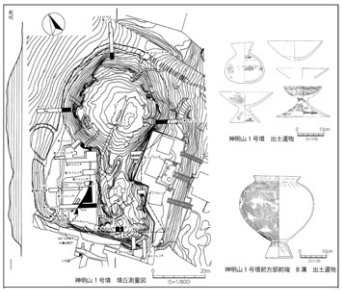


静岡・清水平野の古墳時代への転換

汐入遺跡･･･静岡平野南部の海岸浜堤に近い砂帯上に立地している。西側は周溝付きの平地式住居と掘立柱建物からなる居住域内が溝や柵列によって方形に区画される状況が知られていたが、その東方の地点に棟持柱付の掘立柱建物をとりまく空間と方形の区画で囲まれた居住域を有する

33

スライド33



第19図　神明山１号墳（左）と著墓古墳（右）の比較

神明山1号墳（静岡市清水区）
静大考古学研究室で墳丘の調査を行い、廻間Ⅲ式（古）併行の土器を出土する全長69m、箸墓1/4相似形とみられる撥型前方部を持つ前方後円墳であることが判明した。

34

スライド34

3．東海からみた邪馬台国時代の新潟

新潟と東海の邪馬台国時代の同じころ、環濠集落と異系統土器の共存、高位置集落、古墳時代初頭の広域移動など同時期に類似、関係するような動きが認められる。

①高地性・環濠集落―倭国乱の頃

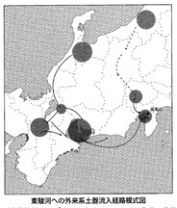
【新潟】
- 古津八幡山遺跡、裏山遺跡斐太遺跡などの高地性の環濠集落が形成されるようになる（緊張状態）。
- 北陸北東部系、東北系土器が共存、折衷土器。

【東海・関東】
- 後期前半の集落が中頃に洪水で埋没する例（登呂）後期後半にかけて高位置などへ移動。
- 後期前半から遠隔地へ移動（菊川式の南関東への移動など）。空白を埋めるように環濠集落を形成して移住。移住先で周辺土器と共存

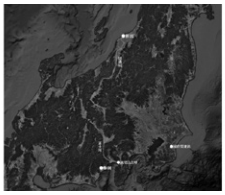
※緊張関係を保ちながらも移住（地域開発）、隣接集団と共存
⇒新しい地域社会を形成する動きでもある。

35

スライド35



東駿河への外来系土器流入経路模式図
（佐藤祐樹2012「高尾山古墳周辺における集落の動態と古墳築造の背景」『高尾山古墳発掘調査報告書』）

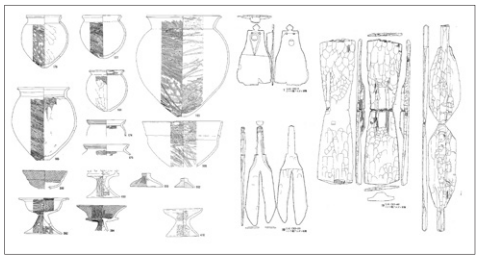


高尾山古墳発掘調査報告書掲載の北陸北東部系土器等
（滝沢規朗2013「高尾山古墳周溝及び周辺出土の北陸北東部系土器について」『西相模考古』第22号）

②新潟から来た人々
列島的な遠隔地土器の広域移動の時代。静岡で北陸北東部系土器が出土すること。折衷品が作られたこと。
⇒新潟から静岡へやってきた人々

36

スライド36



千葉県茂原市国府関遺跡で出土した北陸北東部系土器と製作途上品を含む木製品類
：北陸系は北東部系中心で甕のほか多器種にわたる。ほかに在地系と東海系。東海系台付甕の脚台を意図的に折損。
木製品（アカガシ亜属製農工具類）の生産を専業的に行った遺跡。北陸系土器を用いた人々は技術者集団として移住し、木器生産に携わったのではないか。
※土器の広域遠隔移動の背景には、鉄・装飾品などの流通とともに技術者の移動伴っているのではないか。：学生時代に国府関遺跡の調査・整理に参加して以来…

37

スライド37

まとめ

◇特徴的な高地性・環濠集落が発達する邪馬台国時代の新潟を念頭に、東海・関東の同時期の集落や社会の動向を概観しながら比較を試みた。東海でも環境変動などに対応して、集落の移動や地域間の集団的移住が行われ、移動先で環濠集落が形成される状況が知られる。一方で、移動先でも隣接集団との共存は確認され、新潟の高地性環濠集落の様相とも共通するようである。
環境の変化は、移動と新たな開発を促したともいえる。環濠集落などに示される緊張状態の一方で、交流と開発が進展した時代であったとも考えられるのではないか。

◇次に訪れる、卑弥呼の時代、列島的な遠隔地土器の広域移動の時代。中塚氏は気候の長期変動が収まったと指摘する。古墳（墳丘墓）の広域築造に政治的関係構築が見いだされる。土器の遠隔地交流の背景にはやはり人の移動もあって、むろん政治的な背景を持つだろうが先進・基盤技術の交流も盛んにおこなわれたと推察される（そうした物流研究を参照すべきであるが）。

【参考文献】（スライド中に挙げたもののほか）
静岡県考古学会2014『駿河における前期古墳の再検討』
静岡県考古学会2015『駿河における古墳時代前期集落の再検討』
篠原和大2019「農耕文化の形成と登呂遺跡」『大学的静岡ガイド』昭和堂
新津市教育委員会2001『八幡山遺跡発掘調査報告書』
日本考古学協会新潟大会実行委員会1993『東日本における古墳出現家庭の再検討』

※新潟市文化財センター　相田泰臣様　立木宏明様　には過去の講演会資料等をお送りいただき参考にさせていただいたほか、大変お世話になり、心から感謝申し上げます。

38

スライド38

写真・図出典一覧

スライド１左上：新潟市文化財センター2018『平成29年度史跡古津八幡山弥生の丘展示館企画展関連講座・講演会記録集』
スライド１右下・15右下・16：筆者撮影
スライド２：Google Earth 画像に加筆
スライド４：新津市教育委員会2001『八幡山遺跡発掘調査報告書』等を参考に筆者作成
スライド５・６：令和３年度秋季企画展「倭国大乱～律令国家成立までの越後平野」展示図録、甘粕健編2001『越後裏山遺跡と倭国大乱』新潟日報事業社
スライド７上：中塚武2012「気候変動と歴史学」『環境の日本史１』吉川弘文館
スライド７下：樋上昇2020「東海地方における弥生～古墳時代の遺跡変遷と気候変動」『気候変動から読みなおす日本史３』臨川書店
スライド８・18：静岡市立登呂博物館提供
スライド９・19：篠原和大2008「静岡・清水平野における弥生遺跡の分布と展開」『静岡県考古学研究』40 静岡県考古学会
スライド10・11・20・23：篠原和大2012「登呂の時代の駿河と赤彩土器」『特別展赤い土器の世界～登呂式土器の赤彩を探る～』静岡市立登呂博物館
スライド12・13・14：静岡市教育委員会2005『特別史跡登呂遺跡再発掘調査報告書』
スライド15左・17上：静岡市教育委員会2011『ようこそ登呂ムラへ―登呂遺跡の生活復元図鑑―』
スライド15右上：岡村渉2008「静清平野登呂遺跡」『弥生時代の考古学』８ 同成社
スライド17下：静岡県埋蔵文化財センターHP
スライド21・22：小泉裕紀2002「愛鷹山南麓周辺における弥生集落の動態」『弥生集落論』第５回中部弥生時代研究会
スライド23左：沼津市教育委員会2004『八兵衛洞遺跡発掘調査報告書』
スライド23右上：静岡県埋蔵文化財調査研究所1997『北神馬土手遺跡 他Ⅰ』
スライド24左・25・33上：藤枝市2010『藤枝市史通史編上』
スライド24右：国立歴史民俗博物館編1991『邪馬台国時代の東日本』六興出版
スライド26：篠原和大1998「弥生土器の生産と規格性」『静岡大学人文学部人文論集』48-２ 静岡大学人文学部に加筆
スライド27：篠原和大2009「南関東・東海東部地域の弥生後期土器の地域性」『南関東の弥生土器２』六一書房
スライド28：都内第二遺跡調査会1999『西台後藤田遺跡』
スライド29・30・31・32・34：静岡県考古学会2013『駿河における前期古墳の再検討』
スライド31右・36上：沼津市教育委員会2012『高尾山古墳発掘調査報告書』
スライド33下：静岡市教育委員会提供
スライド36下：滝沢規朗2013「高尾山古墳周溝及び周辺出土の北陸北東部系土器について」『西相模考古』第22号 西相模考古学研究会
スライド37：長生郡市文化財センター1993『千葉県茂原市国府関遺跡群』より構成

■令和３年度 企画展３関連講演会（第２回）

新津丘陵の縄文遺跡
～縄文土器の形と文様の変化～

田中耕作（新潟市文化財センター）

はじめに

今回の「新津丘陵の縄文遺跡」という企画展を担当しました田中です。普段は弥生の丘展示館で、小学生への遺跡の説明や体験学習の補助という仕事をしております。

お手元にパワーポイントのスライドを焼いた資料と、展示解説のパンフレットをお配りしてあると思います。展示解説パンフレットに詳しく書いてあるので、その流れに沿って、話を進めていきたいと思います。

さて、今回の展示ですが、副題が「文様と形のうつり変わり」となっています。たくさんの土器がずらっと並んでいるような展示のイメージをお持ちだったかもしれませんが、新津丘陵の縄文遺跡はそれほど多くはないのです。また発掘調査も、道路建設とか圃場整備のように大きな開発で大々的に発掘して遺物がいっぱい出てくるという調査ではなくて、ほとんどが宅地造成のように小さな調査が多いものですから、遺物量も限られることになります。今回、当市で持っている土器がそんなに多くないこともありまして、それをカバーするために、形になっている土器を新発田市さんと、五泉市さんからお借りしました。また展示説明は、新聞が対象を中学生くらいからとしているのと同じとし、展示ではいろいろな模型を作ってみました。

考古学をやさしくしよう

（スライド２）では画面に入っていきましょう。最初に「考古学をやさしくしよう」と出てきましたが、この佐原眞さんは、奈良の国立文化財研究所に長く勤められて、日本の考古学をけん引されてきた方です。平成４年、1992年に、新潟県埋蔵文化財センターの開館記念講演会というのがユニゾンプラザでありまして、そのときに講師として来られたんですね。超有名人だったものですから、みんなで喜んで聞きに行きました。最初からテーマが決まっているわけではなくて、会場でどんな話を聞きたいかとテーマを募りまして、その中から４つほど選んで解説してくれたんですね。何を話されたのかは忘れましたが、最後にドイツ語で歌われたというのはみんなが覚えているという、そういった会でした。

その佐原さんが常々言っていること、書かれていることですが「考古学をやさしくしよう」「考古学を楽しくしよう」ということです。一番大事なのは、発掘の成果などを一般の方々にわかりやすく還元しなければいけないと。どうしても考古学の世界、専門用語を多く使いますし、また書き物ですと、わざと難しく書いてるんじゃないかと思うぐらいの文章もあります。それについては、自分でもそれじゃいけないと思ってはいますが、なかなか実践できないということがあります。

真ん中に書いてありますが、難しい言葉を日常語におきかえるとか、聞いてわかる言葉を使うとか、それからどうしても言い換えができなければ解説を加えると言われています。よく難しい言葉に単にルビ振って「はい、やさしくしました」っていうのは、やはりそれはおかしいんであって、内容を理解できなければ意味のないことですね。ただし、学術用語、どうしても使わざるを得ない言葉、言い換えができないという用語もあるのですから、それはしょうがないでしょう、というような言い方もされています。

今日ここに来られた方々は、考古学や縄文土器などに興味をお持ちの方が多いかと思っているのですが、内容的にちょっと難しい話が入ってくるかもしれません。展示できた土器が少ない分、「考古学では土器をこういうふうに見るんだよ」とか「このような考え方をしているんだよ」という、そういった基礎的なところをちょっとお話しして、これから皆さんが他の展示を見るときの参考にしていただければと思います。ちょっと難しいかもしれませんが、なるべく気持ちだけはわかりやすく話したいと思っております。

考古学の専門用語

（スライド３）では、本題に入っていきたいと思います。「難解な考古学の専門用語」、まず真っ先にこれが出てくるのですが、左側に赤字で書いてある「遺跡」、それから「遺構、遺物」と、これはもう言い換

えようもない単語ですね。遺跡の中には、その性格によって集落ですとか、製鉄の遺跡だとか、お墓の遺跡、洞窟とか、そのように分類できます。水中考古学というのも、ダイバーが潜って調査していますね。

それから「遺構」という用語ですね。遺構というのは土木工事です。土を盛ったり削ったり、そのようにして土に刻まれた跡です。よく聞くのは「竪穴住居」ですね。半地下の家と考えてもらえばいいと思います。それから「土坑」、青字で書いてありますが、穴ですね。その穴もいろんな種類があって、貯蔵のための穴があったり、お墓であったり、落とし穴があったりと、そのような穴のことを土坑というのですが、そういったいろんな用語が出てきます。最近は盛土遺構というのもあります。ごみ捨て場みたいなところですが。

次に「遺物」。遺物とは昔の人たちが使った道具、土器とか石器。それから人骨、そして料理のゴミ。大体、遺跡から出てくるものはほとんどがゴミですよ。壊れた土器や石器作りのカス。ゴミを発掘しているということになります。材質で分けると土器・石器・骨角器・木器などに分けられますし、使い方では目的に応じて土器の鉢や壺の形だとか、斧類とか、あと土偶というようなマツリの道具とか、いろんなものがあります。

さらに、遺物を分析する上でどうしても使わざるを得ない、必ず出てくる言葉に「型式」という学術的な用語があります。馬高式とか、何々式という、「式」というのはこの型式の「式」ですね。これが考古学の一番の基本の用語になります。これをちょっと説明してみたいと思います。それから、「編年」という、字のごとく、年を編むということになりますが、どのように新旧で土器が並んでるかということですね。それから、土層です。層と言えばいいんですが、なぜか「層位」と言うんです。層の順序という意味なんでしょう。それから一番最後、「遺棄」という言葉。聞いたことがあるはずです。実は報道でよく出てくる、死体遺棄とかいうときに使う遺棄です。残されたものという意味です。このような言葉もよく使います。

今日の話の流れ

（スライド４）流れといいましても、もうレジュメが皆さんのところに渡っていますので、このような内容で進めます。１から６と書いてありますけれども、この１が一番長くなります。１が終わったところでおおよそ半分の時間と考えていただければと思います。ここら辺で多分切りがよくなると思うので、いったん５分の休憩を挟みます。そして、展示してある土器の流れに従って、前期・中期・後期・晩期という順序で、なおかつその時期に特徴的ないろいろなもの、文様の付け方とか、折衷の話とか、深鉢の使われ方ですね、そのようなものを該当する時期のところに挟み込む形で話したいと思います。

１　縄文時代とは

（スライド５）縄文時代は、今から１万6500年から１万5500年前に始まります。これは放射性炭素Ｃ14を分析して年代を求めるという方法が、今は主流になってきています。ただ、分析はどうしてもプラスマイナスという誤差が出るのと、分析資料がまだ多くないということで幅がありますから、一番古く取りたい人は１万6500年前としますし、慎重な人は１万5500年前を使う。縄文時代の始まりは、このぐらいの幅に収まるということです。

パンフレットを１枚めくっていただくと、下に年表の帯があります。縄文時代は約１万3000年続くのです。この黄色いところが縄文時代で、この帯の84％ぐらいを占めます。一番右の端、明治・大正・昭和・平成・令和。これらを全部合わせた藤色のところがこのぐらいの幅ですから、いかに縄文時代が長いかということが分かると思います。

縄文時代は、狩猟・採集・漁労の生活とよく言われますが、ドングリが主食です。この黄色い帯の中を草創期・早期・前期・中期・後期・晩期と区分しております。また、それぞれの中を細分するときに、考古の世界では前葉・中葉・後葉とか、初頭・末葉とか、そういった用語を使うのですが、普段なじみのない言葉ですよね。そこで今回の展示パネルでは、初め頃・中頃・終わり頃、もしくは前半、後半と使いました。

一番長い草創期。土器が作られたときから縄文時代になるのですが、この頃はまだ最終氷河期に当たります。縄文時代の前は旧石器時代です。日本列島は４万年から３万8000年ぐらい前から人が住み始めたと言われています。その草創期は、旧石器時代の終わり頃と同じような石器を使っています。細石刃と言う細かい石器を組み合わせた槍や、刃先だけを磨いた局部磨製石斧など。ただし土器を持っていて、狩りをしながらの移動生活。ですから、ちょっと私たちがイメージしている縄文時代とは違います。定

住の反対は遊動、遊動生活です。それは１カ所にいつも住むのではなくて、時期が来たらまたどこかに移動して動物を追うとか、そのような生活になります。そうすると多くの家財道具を抱えては移動できないです。だから、土器は１個か２個しか運べないし、縄文時代でよく使う石皿という重い石なんか、当然持っていけない。

それが早期以降は、気候も温暖化して定住生活が始まり、縄文文化らしいいろんな要素が出てくることになります。大きな集落、関東・三陸とか太平洋側では貝塚が作られるとか、ドングリを保存する穴が出てくるとか。そして、１カ所に住んでいると墓地・墓域ができます。遊動生活ですと、人が亡くなればその場に葬るわけで、墓域はできないのです。

それから、弓矢の発明やいろんな石器も出てきます。前期以降は土器の種類が増え、漆を利用し、主食のドングリを加工する石皿、あとマツリの道具と書きましたけれども、土偶とか、装身具などの飾りですね、そのようなものも出てきます。それが縄文時代の特徴になります。そのため人によっては、この早期以降を縄文時代とし、草創期はまたちょっと別じゃないかなという人もいます。

土器は時代のモノサシ

（スライド６）「土器は時代のモノサシ」という、ちょっと変わったタイトルになっていますが、実は年表です。普通の、歴史時代の年表は何年に誰が何したとか、イイハコの語呂合わせで1185年に鎌倉時代が始まるというように、何年、何年というのが意味を持ちます。縄文時代では、土器がモノサシになるというのは、どういうことかと言いますと、土器を古いものから新しいものへとずーっと並べるのです、地域ごとに。そうすると、この土器よりもこっちが古いとか、これよりもこっちが新しいとか、そのような古い、新しいという前後関係が明らかになります。

もう一つ土器がモノサシになるのは、土器と一緒に出てきた石器や住居跡などの時期を知ることができるからなのです。変化の乏しい石器や住居そのものでは年代を知ることができないのですが、そこに一緒に出てきた時期のわかる土器があれば、その石器とか住居の時期を知ることができます。土器は大量に作られていろいろと変化し、さらに生活に密着していることも、土器がモノサシになりやすいという理由になりますね。

次に、パンフレットの右下に書いてあるのですが、ＡＭＳ放射性炭素年代測定法という、炭を分析して年代を知る方法があります。炭素というのはＣ12、13、14とあり、その中のＣ14が放射性炭素といいまして、ものすごく量は少ないものの、大変な仕事をしてくれます。5,730年かけて半分になるという性格を利用して、この炭は今から何年前か、今からというか、基準である1950年から何年前かということが分かるのです。

このパンフレットの年表をずっと見ていきますと、ちょっと字が小さくて分かりにくいですが、縄文時代中期の後ろのほうに、エジプト第１王朝、ピラミッドが作られた頃は、日本は縄文中期ですね。それから晩期のところ、中国で「子曰く・・・」という孔子が活躍していたのは、日本では縄文晩期になるのです。こういうことも、何年という年代が分かると、比較することができるようになりました。

土器型式と編年

（スライド７）土器型式とは、形や文様などが共通する土器のまとまりのことを言います。同じような土器がある程度の広がりと、それから時間幅を持っていると。あちこちで同じ土器が作られているということは、「このような形や文様で作らなければいけない」という、そのような地域ごとの約束事があり、ほかの地域とは区別ができるということです。そこで、この土器のひとつのまとまりを「土器型式」と言って、例えば馬高式とか三十稲場式と言うような呼び方をします。何々式というときは、最初に見つかったとか、まとまったいい資料があるとか、そのような遺跡の名前にこの「式」が付けられます。馬高式は、馬高遺跡の出土土器に対して付けられた型式名になりますね。

それから、土器編年というのは、モノサシのところで言いましたように、その地域の土器を順序よく並べ、それを隣接する地域の土器群と比較して、横の関係もつかみます。相対年代という言い方をしますが、比べる年代となります。時間がタテ、広がりがヨコの関係となります。

そこに、先ほどの何年前という放射性炭素年代を加えますと、この土器は何年前、こっちの土器は何年前と、土器に年代が付くことで、遠隔地であっても同じ時期の土器を比べることができます。

土器の形と部分の呼び方

土器の形と部分の呼び方について、お話しします。（スライド８）の下に縄文土器の基本的な形を示しました。これは、甲野勇の『縄文土器の話』という一

般向けの概説書に載っているものです。正方形を９分割し、その比率で深鉢・鉢・皿・甕・壺を基本の形としています。ただ実際は、鉢というよりも浅鉢をよく使います。その浅鉢も人によって、時期によって、鉢に近かったり、また皿に近かったり、厳密にここから浅鉢だよとか、ここから鉢だよという、そこまでの区別はないです。それから、深鉢はほとんどが鍋として使われる。煮炊きの道具ですね。先ほど言いました草創期の一番最初の縄文土器というのも、用途は鍋から始まりました。ヨーロッパの地中海では貯蔵用の土器から作られるので、違うんですね。日本の場合は鍋。そこで深鉢を、深鍋という言い方をする人もいます。

次に、土器の説明などで、口縁部とか、体部・底部とか、そのような言い方を聞くと思いますが、これは陶磁器の呼び方から来ています。図の右上のほうですね。田口昭二さんによる『美濃焼』の部分名称です。碗では体部が口縁部・胴部・腰部に分かれています。壺には口頸部や肩部があるというように、器種によってやや異なります。それを考古学のほうで借用しまして、深鉢の場合は、口縁・口縁部・体部、人によっては胴部と言いますが私は体部を使います。それから底部・底面と。厳密に境目はなく、大体こういう部分だと。口縁部は器種に限らず文様が多く付けられるので、よく使います。

口縁の形では、直立、直立は大丈夫ですね。内傾というのは、内側に直線的に傾くんです。外傾は外に傾く。内湾というのが内側にこう湾曲しているんですね。その反対が外に反るという外反。こういった口縁の断面の形が言い方としてあります。

ついでに、私は学生のときに、先輩から口縁の先端のところを「口唇」って教わったんですね。でも山内清男という著名な縄文土器研究者は、口唇の使い方として、「口唇の作出のあることもあり、ないこともある。単なる口端は‥‥」という言い方しています〔山内1930〕。つまり、口縁部の端の外面は、本来は口端という名前で、そこに「いかりや長介」の唇みたいなものですが、粘土を付けられて膨らませると、その状態を口唇と呼ぶ。ちょうど右の図の壺のところ、これ本当は陶磁器では玉縁口縁と言うんですが、このように、ちょっと膨らんでいる状態を土器の場合は口唇と表現するようです。

以上が、土器の部分の名称です。最も使われるのは、口縁・口縁部・体部（胴部）・底部でしょう。これだけでも覚えておけば、土器の見方が変わってくるかと思います。

土器を分解して見る

土器をどのように見たら良いかですね。同じ型式、違う型式。どこに注目して比較するかということです。（スライド９）の右上の土器は、今、展示していますが、後期初め頃の三十稲場式の標準的な土器です。表の真ん中タテの列が「特徴」とした比較項目です。部位と言いますが、場所ごとに分けて考えます。全体の形を見たときに、口縁部がくびれた形ですね。これは蓋が載る形ですが、ここに無紋という文様のない部分があって、橋状把手が４つ付きます。そのすぐ下には粘土紐を貼り付け、そこに刻みを入れています。頸部の刻み隆帯です。そして、体部全面に特徴的な刺突文が施されるという、これが標準的な形になります。

これを念頭に置いて見比べます。左下は菅生田遺跡という宮城県南部の遺跡ですが、この場合、体部の全面刺突文以外は全部三十稲場式と同じですね。そして、逆に愛知県の権現山遺跡、この場合は体部の全面刺突という、特徴的な刺突文はそっくりなので、この刺突のやり方が伝わっていったかもしれません。けれども、それ以外の要素の特徴はみんな異なり、これは三十稲場とは言えないと判断するんです。ですから、標準に対してどのぐらいまで一緒なのか。３分の２一緒だったら、もうその型式の仲間だよと。半分だったら、いわゆる折衷、折衷という両方の特徴を併せ持った土器だよという言い方をするようになります。ただこの権現山遺跡だって、三十稲場式に特徴的な花弁状刺突文の体部破片だけ出れば「三十稲場ですよ」と言えるわけです。ただ全体見ると違うよと、そういった同定の仕方になります。

土器の新旧と同時

（スライド10）土器編年、土器を順序よく並べていくときに、新しい、古いをどうやって見分けていくかという原則があります。これが一番大事なんです。（１）層位学的方法、（２）型式学的方法、（３）一括遺物です。

まず（１）の層位学的方法には二つの法則があり、ひとつは地層累重の法則といいまして、水平堆積した土層は、下のほうが古く、上の層が新しいということ。これは誰でも「はい、そうですね」と思いますよね。もうひとつは地層同定の法則。遠く離れていても同じ層がある。これは火山灰が当てはまります。姶良・丹沢テフラという火山灰があって、鹿児島湾の一番奥がちょっと丸くなっていますが、あれ

がひとつの大きい火口です。その大きな火山が噴火するのは、２万9000年前から２万6000年前頃です。火山灰は、秋田、それから岩手の南辺りまで飛んでいます。それでこの火山灰層の上層か下層かで年代区分ができます。

また、北朝鮮の白頭山。聞いたことありますよね。白頭山は平安時代中期の西暦946年に大きな噴火をしていて、『興福寺年代記』という奈良のお寺の記録に「10月７日夜、雪のごとき白い灰が散る」とあるんです。秋田県の平安時代の竪穴住居を掘ると、埋土に数㎝の白い層が入っています。それが白頭山の火山灰だそうです。このように、遠く離れていてもその火山灰が鍵となって年代の前後をつかめるということです。近い所ですと、西会津に沼沢火山があり、縄文前期の終わりぐらいの大木６式土器の時期に火山灰が降り積もり、その上と下とで土器群を分離することができます。

（２）の型式学的方法。これが一番難しいのですが、土器がどのように変化していくかをつかむ考え方です。本来あったものがだんだんと崩れてくる。役割を失っていく。よく使われるのが、背広ですね。この左襟に穴がありバッジを付けたりしますが、もともとはボタンの穴だったのです。本来の機能が退化し、役割が変わっていくという例。自動車や服装も、詳しい人なら新旧で並べられますよね。こういう変わり方を調べて、こっちが古い、新しいというのを確認していくのが型式学です。このようにだんだん失っていく、崩れていくと言われているのですが、逆に発展していく、だんだん豪勢になっていく、というのもやっぱり変化です。その新旧の流れの方向性をつかむには、層位学や一括遺物の方法を使います。

それから折衷土器。これは別型式の土器の構成要素や文様が、ひとつの土器に取り込まれている状態です。ということは、違う地域の別型式の土器が同じ時期、同時とわかる一番確実な土器になります。

それから（３）の一括遺物の考え方です。これは穴の中などで、一緒に出てくる土器とか、そのようなものを基にして「一緒に出土した。だから一緒だ」と考えていくのですが、そう単純ではなくて、土から出てくるのは私たちが発掘した時、つまり埋められた段階を示しているだけなので、土器が作られた時期じゃないのです。ここが一番大事で、知りたいのは一緒の時期に作られた土器なのか、時期的に前後している土器なのか、という点です。これについては後でちょっと詳しく説明したいと思います。

（１）層位学的方法

（スライド11）まず層位学的方法の実践から話します。層位とは、土が堆積した層の単位を示す用語だそうです。左の図は、阿賀町室谷洞窟の土層断面図です。昔の上川村の山奥、有名な草創期の遺跡でして、長岡市立科学博物館の中村孝三郎さんがこんな山奥で発見した遺跡です。発掘には、皆さんご存じの小林達雄さんら大学生が一緒に参加して、そのときの最新の調査方法でこのように層を分け、遺物も層ごとに取り上げた画期的な発掘調査です。室谷下層は草創期、室谷上層は早期以降に当たります。

それから右の写真は、東北大学が発掘した宮城県の中沢目貝塚という遺跡の土層堆積になり、これは報告書を複写したものです。貝層と土層、それらの混ざり具合で混土貝層とか混貝土層といった言い方をしますが、そのような層が順序よくミルフィーユみたいに堆積しています。これを１×２ｍとか、２×２ｍというような狭い範囲で掘り、横にスポスポって切って掘っていくと、出てきた下の土器は古い、上が新しいというように分けていけるのです。それが分層発掘調査になります。

ただ、山内清男さんという縄文土器研究の第一人者は、縄文土器編年の枠組みを確立した人ですが、「土層は生では使わない」と言っていたそうです〔田中1992〕。それは見えない土層の乱れとか、上から掘った穴とかがあるからと。この土器はそれよりも下層から出た、それを直接は使わないで、量の変わっていく傾向をつかむのだそうです。下にあったのが上層に行くとだんだんなくなるとか、この層から別な土器が加わるようになったとか。そうして土器の古い、新しいを調べていくということです。

（２）土器型式の時間と空間

型式学的方法のうち、土器の型式変化と広がりについてスライド12・13で説明します。

（スライド12）は大雑把な概念図です。ここでは土器型式Ａを一番古いとします。ここから時間がたつと土器型式Ｂに、そしてＣに変わっていくのですが、どうして変わるかと言ったら、外から何らかの刺激や情報が入ってきて「そっちがいいな。じゃあちょっと加えてみようかな」っていうように徐々に、あるいは急激に変わっていく。その変化の目立つところで区切ると、別型式の成立となります。隣の土器分布圏に含まれてしまうことも、また逆もあります。

（スライド13）は、長岡市を中心とした中期中頃の

火炎土器の変化と、同じ時期の周辺地域の土器型式の広がりです。火炎土器には火焔型と王冠型があります。左の図は時間の流れを示していて、東北系の大木８式を母体として、北陸の新崎式や北関東・長野の焼町系土器の要素が加わって火炎土器が成立し、それが順次変容して、栃倉式に変わっていくと。ひとつの地域の中での型式変遷を示しています。

右の図は、火炎土器の時期に、周辺地域ではどのような土器型式が並存していたかを示しています。東北では大木８ａ・８ｂ式があって、もっと北の秋田・青森では円筒上層式。関東では勝坂式・阿玉台式・加曽利Ｅ式とか、群馬の新巻式・焼町式、そして長野・山梨では勝坂式・曽利式。上山田・天神山式は北陸の土器です。このように、別々な土器型式を持っている集団が同じ時間幅の中で共存し、またそれぞれの間で交易というか人の行き来があり、情報の伝わるのが土器の動きを通して見えます。

（３）一括遺物の考え方

土器が同時期か、新旧関係があるかを知るには、遺物の共伴出土と一括遺物という考え方を理解することが必要です。土器捨て場でピッタリくっついて出土した土器は共伴出土ですが一括遺物ではありません。墓の副葬品や貯蔵穴に並べられた完形土器は、目的をもって埋置しているので一括遺物です。また、共伴出土は同時に埋まったものであり、遺物の作られた時期が同じとは限りません。

（スライド14）に概念図を書いてみました。長方形の枠を遺構としますと、上に発掘と書かれた真ん中の枠内、この丸とか三角・四角、これを土器と考えてください。この３種類の土器が一緒に出てきましたよ、ということです。その３種類の土器は、作られた時期がいつかは分かりません。でも、埋められたときは一緒だったのです。一緒に埋められて、そのまま長い時間がたって、発掘で一緒に出てきたことになりますから、出土の同時というのは間違いありません。でも、いつ作られたか、一緒に作られたのか、別なのかは分かりません。それを知るためには、土坑とか他の遺構では、土器がどういう組み合わせで出てくるか。そのような例が集まってくると、例えばこの三角と四角がいつも一緒に出てきますよ、となると、この三角と四角は同時に作られたと考えられます。製作の同時、同時に作られたものだと言えます。佐原眞さんは、５つ以上の例があれば確実に同時期だと言うのですが〔佐原1974〕、ただ、そのような発掘例は少ないです。

一括遺物は、同時に埋められたもの、目的を持って一度に埋置されたものを指します。

右上の写真は、私が掘った弥生時代のお墓です。亡くなった方をいったん埋めるなりして、何年か後に骨だけを取り出して、こういう壺に入れてまた埋め直す、再葬墓というお墓になります。これは間違いなく当時の人が一緒に埋めたのですが、これすら本当に全部が一緒に作られた土器かはわからないですね。ずーっと割れずに取っておいた昔の古い土器を一緒に埋めているかもしれないですから。下の写真は縄文晩期の終わりころの穴になります。浅鉢が３個と、鉢が２個と、注口土器が１個、完形土器だけが埋まっていました。穴倉のつもりだったのか、目的を持って当時の人がこう置いたというもので、一括遺物と言えます。

そして（スライド15）。土坑の危ない共伴出土例です。私がまだ若かりし頃に掘った遺跡で、縄文晩期後半の大きな土坑になります。大きな土器片が重なり合って出土したのです。写真と図面をとってあります。右に縄文晩期後半の編年表、つまり古い土器から新しいものを上から下へと並べた図があります。浅鉢とか深鉢とか並んでいます。この赤印で囲った土器、この土器１個だけが上野原式という古い土器で、そのほかの土器は全て鳥屋１ｂ式という２段階新しい時期になるのです。つまり、作られた時期の異なる土器が一緒に埋められた状態ということです。古いものが新しいものに混じって出土する可能性は、いくらでもあります。編年が定まっていなかったら、同時期と扱われるでしょう。

話は飛びますが、中世の室町時代の終わり頃の福井に、織田信長に滅ぼされた朝倉氏の城下町の一乗谷があります。そこで発掘された医者の家から、中国の龍泉窯の非常に立派な壺が２個出ているんですね。鎌倉時代の高級な青磁の壺です。これが室町時代の医者の家から出土した。どう解釈するかといったら、その医者は骨董趣味で、鎌倉時代の壺を集めていたんだと。ですから、作られた時代と埋まった時代はイコールじゃないということがよくわかると思います。

それから（スライド16）、これは今回展示してある新潟市平遺跡の１号住居と土器になります。この後期初めの竪穴住居は発掘例が少なくて、いい例です。周りにぐるっと柱の穴があり、真ん中に地床炉というんですが、土が焼けたイロリがあります。石組みを持たない炉です。土層断面図を見ると、土が左側

から流れ込んでいるというか、埋められているような状況が見られます。土中から出てきた土器は破片ばかりで、これはどう見ても埋めた土に入っていた土器だろうと解釈します。こういう出土状態では、住居内の出土共伴とは言えないですね。一緒に出てきたんだよというのはちょっと使えないです。やはり形のある土器で比較していかないと。資料を扱うときには、こういうものは注意しなきゃいけないってことになります。

（スライド17）は、福島県三春町の西方前遺跡で、竪穴住居の中に複式炉という大きな炉が壁近くにあります。炉の端に土器を埋めた火種入れみたいな場所があって、広い方は石を敷いてあります。中期の終わり頃でちょうど一番寒い時期に当たります。入り口がこの炉の近くなので、風が入り込む寒いほうに炉を作って、少しでも家の中を暖かくしようという知恵です。この炉には、上と下を打ち割られ輪切り状になった２個の土器が、入れ子にして埋められています。右の写真の上の土器は、福島や山形に多い大木10式土器で、下は関東の加曽利Ｅ４式で、ほぼ同じぐらいの時期。離れた地域の土器が一緒に出ています。

遺構と遺物の新旧関係

（スライド18）です。左は土坑の新旧を示す一番単純な模式図です。上が平面図で、発掘すると、こう線引きします。右が新しくて、左の穴を切っています。「切ってる」という言い方は変ですが、考古学の特別な用語ですね。新しい方が「切ってる」、古い方が「切られている」と、切り合い関係と言います。それから遺構や遺物の出土状態では、「生きてる・死んでる」も使います。後世の撹乱を受けている場合は「死んでいる」です。さて、土坑の断面を見れば、右が左を壊しているので、左が古くて、右が新しい。そうなると、この土坑の中に土器が含まれていると、左の土坑の土器が古くて、右の土坑の土器が新しいと言えます。

右の略図を見てください。土層の逆転と書きましたけれども。緑の草が今の地表です。掘り下げていくと土坑が出てきます。例えば、赤い●土器の時代が縄文時代であり、上に平安時代の層があったとします。この穴、平安時代の途中で掘られたかもしれないのですが、この上のほうの平安時代の青い▲土器の入ってる土が先に崩れて、下へ落ち込みます。後から、本来古いはずの赤い土器が後から落ちてきます。そうなると、土坑の中では深さが逆転するんですね。これは、新潟大学におられた小野昭先生から聞いた話で、沖縄の洞窟を発掘したときに、この現象だったのだそうです。古いはずの遺物が上で、新しいはずのが下から出てくる。ですから、遺構での遺物出土状態の解釈には、注意が必要なのです。

右下のメモです。埋置、埋め置くとか、埋め納める。目的や意識を持って行った状態ですね。それに対して廃棄や土器片などが偶然土に混じっていたもの。土器にとっては無意識で行われた行為の偶然の結果。さらに遺棄というのもあります。報道で耳にする死体遺棄もそうですが、置き忘れたとか災害の結果。榛名山の噴火で、古墳時代のよろい着た武人が倒れ込んだまま埋まっていたとか。それから有名なところでは、千葉県の姥山貝塚の竪穴住居から、成人の男１人と女性が２人、子ども２人かな。そういう人たちが住居の中に埋まっていたと。それらは多分災害、疫病か何かで、その状態のまま手を加えずに埋めてしまったんじゃないか、そのまんまの状態ですね。遺棄ですが、そのように遺構と出土物は解釈されます。

２　新津丘陵の縄文遺跡

（スライド19）やっと展示にたどり着きました。パンフレットの１ページをご覧ください。新津丘陵は新潟平野を北に向かって飛び出すような形をしていて、東に阿賀野川、西に信濃川が流れています。95～110mくらいの里山と言われるような低い山々ですが、南のほうへ行くともう少し高くなります。丘陵の端々に作られた遺跡の標高は15～22mです。

丘陵上には、前期から晩期の遺跡があります。その中で規模の大きな遺跡は丘陵北端の秋葉遺跡と東側にある平遺跡で、丘陵の縁辺の緩やかな平坦面、平野を臨むような場所に遺跡が作られています。平遺跡は中期初めと後期前半の遺跡で、多くの土器を展示しています。ちょうど、平遺跡での時期が空白の中期中頃から終わり頃までが秋葉遺跡になります。平遺跡と秋葉遺跡は直線で約３km離れています。晩期後半の大沢谷内遺跡は、新津丘陵から西へ約１km離れた田んぼの真ん中にあります。地図でいえば左下です。それから大沢谷内北遺跡も同じ時期です。

各遺跡の詳しい内容については、パンフレットの最後のページをご覧になっていただければと思います。写真を若干用意してありますので、それに沿って説明します。

（スライド20）秋葉遺跡は、秋葉神社や秋葉公園の近く、新津丘陵の一番北の端になります。下の写真にありますように、家が建つ範囲を四角く発掘調査したり、上の写真は斜面に駐車場を造成するための調査で見つかった縄文後期の石囲い炉です。山の中腹のこの遺跡と平地との高低差ですね、これを比高差という言い方をするのですが、おおよそ15メートルぐらいです。この遺跡では、平成10年から13回の発掘調査を行っています。

（スライド21）これは南側から見た平遺跡で、今度は丘陵の東側の端になります。この杉林で囲まれたところが現在の集落で、丘陵上になります。丘陵の右端に平遺跡があります。発掘調査は昭和56年と令和２年の２回行われています。令和２年の発掘調査では、下の写真にありますような穴の中から、高さ16.5㎝の非常に小さい土器が出ています。この穴は半分なんですが、出方からすると、もしかしたらお墓の副葬品かもしれないですね。中期の初めごろの土器になります。この遺跡からは、石錘・土錘と言われる重りが非常に多く出てるので、阿賀野川とか、横の能代川で魚を捕ったりする網に使われたのだと思います。こういうものがいっぱい出てきています。

（スライド22）これは大沢谷内遺跡、田んぼの中です。国道403号のバイパス工事で発掘した遺跡になります。パンフレットにありますように非常に変わった遺跡でして、不純物が多い天然のアスファルトを精製している遺跡のようです。遺跡から出ている遺物に、日常使う道具が少なかったり、マツリの道具がほとんどないとか、普通の遺跡とは違う性格なようです。それから物々交換に使う交易品ですね、そのようなのがいくつか出ていることから、報告書では交易の中継地点のような特別な遺跡と考えているみたいです。

考古学は、学問は何でもそうですが、書かれたことをそのまま信じない、なるべく疑ってかかるということが大事でして、私が疑問に思ったのは、何で山裾で採れたアスファルトを、わざわざ１kmも離れた所まで運んできて精製するのかと。山のその場で精製すればいいんじゃないかなということです。そのような疑問を持つことは大切だと思います。

新潟平野に入る道

（スライド23）次行きます。これは各地から新潟平野に至る道です。基本的に大きい川沿いに人は行き来するようです。新潟平野に入ってくる人の動きは、ひとつは当然ここでは海ですね。北陸からは海沿いに入ってきますし、北からも当然入ってきます。それから、山形の置賜盆地ですね。そこは、もっと東に行けば仙台になりますから、仙台から山を越えて、荒川を通って入ってくるルート。それから福島から会津を通って阿賀野川で入ってくるルート。面白いのは会津から只見川沿いに魚沼に入ってくるルートがあります。今の只見線ですね、鉄道でいうと。そして関東からは、福島の郡山・会津のルートと、群馬の北から軽井沢、そして千曲川を通って信濃川から津南・十日町に入ってくる、こういうルート、その途中から上越に入ってくるルートと、こういうのがあります。

たとえば、飯豊山の登山道で石鏃を拾った話もありますが、基本的にはそんな無理して奥山に行かなくても、川沿いを人は動くと考えていいと思います。阿賀野川下流域の土器は、会津とそっくりな土器がいっぱい出ているんですね。ですから深い交流があったことがわかりますし、逆に津南のほうの魚沼は、長野と非常に強いつながりがあって、関東に近い土器も長野を通って魚沼にいっぱい入ってくる。新潟県は広いので、また高い山で囲まれているので、地域地域での人の動き、どういったルートで情報が入ってくるか、ものが動くかは、決まっているようです。

人が動くと、婚姻も考えられますし、変わったもの、珍しいもの、皆さんよくご存じのヒスイや黒曜石、そしてここで採れるアスファルトも運ばれる。アスファルトなんかは太平洋側の、特に仙台湾の北側や三陸海岸ですね。そこで骨角器、鹿の角とか骨で作ったモリとかヤスとか、そういった漁労具の接着剤としてよく使われています。アスファルトは水をはじきますからね。接着剤にはニカワや松脂だとかいろんなものがあるでしょうけども残らない。漆もありますが、アスファルトがよく使われるようですね。そういった特別な、どこにでもあるものじゃないものは、やはり交易品。お土産とか、物々交換とかで運ばれているようですね。南関東ですと貝塚が有名です。とてもひとつの集落で食べきれるような量じゃない、べらぼうな量の貝が捨てられているのです。よく言われているのは、干し貝として山のほうへ運び、物々交換するのではないかと。そのような道としては、やはり川沿いが大きな交通路、交易路になるのではないかということですね。土器も同じように、こういうルートで伝わり、広がっていくことになります。

土器の分布圏

（スライド24）土器の分布圏は、中心となる場所とその周辺部です。周辺というのは、違う土器型式を半々ぐらいに持っているような遺跡です。それから遠隔地といって、スライド９で型式の比較をするときに、愛知県と宮城県の土器を示しましたが、ああいう飛び地的にぽんぽんと出てくる遺跡です。ですから、ほんとの分布じゃない。やはり中心的な分布域と、それから周辺でいっぱい出てくる周辺域をまとめて、土器分布圏という言い方をします。

３　縄文前期の土器

ここから、今展示している縄文土器の概要を時期ごとに説明していきます。まずは前期の遺跡ですが、新津丘陵は少ないです。パンフレット３ページ目の下の帯のところで、前期のいつぐらいか大体わかると思うのですが、新津丘陵周辺で一番古い遺跡は、居村遺跡Ｅ地点で、前期初めぐらいですね。布目式と言って、角田山麓近くに標識となる布目遺跡があります。（スライド25）の左上、縄の端だけを横に何段も転がしていくループ文という文様です。

それから、真ん中は新発田市からの借用で、鉄分の多い赤っぽい土器に、白く細い粘土紐を貼って、その上を細い竹を割ったような道具で、てんてんと押して下がるようにして付ける文様でして、結節浮線文といいます。こういう非常に変わった土器があります。これは北関東から新潟にかけての、前期の終わり頃に流行っていた土器だそうです。

それから下段の２つの写真は、草水町二丁目窯跡という、平安時代の窯跡の遺跡ですが、その一角から出土した縄文前期の土器になります。左の土器は、ガラスの金魚鉢のような形ですが、文様は細い粘土紐を貼った結節浮線文で真脇式。右下は、細い粘土紐を貼っただけの朝日下層式ですが、これらはいずれも北陸に分布の中心のある土器群です。また左下の、幅広い粘土の帯を貼り付けた文様は、東北の大木６式になります。右上の地図を見ると、赤い線の北陸の土器の分布圏は、日本海の海岸線を新潟県から山形県まで広がっています。東北の大木６式は青い線。新津丘陵は両方の分布圏が重なっている場所で、両方の土器を持っていますが、草水町二丁目窯跡では北陸系の土器が圧倒的に多いです。

縄文土器の作り方

（スライド26）ここで縄文土器の作り方の話しをします。スライド26～28です。昨年東京の江戸博物館で縄文時代の展覧会がありました。ちょうどコロナ渦だったので残念ながら行けなかったのですが、その中で多摩ニュータウン遺跡。ここに書いてある多摩ＮＴというのは、多摩ニュータウンという意味です。多摩ニュータウンNo.245遺跡の51号住居から、家の中で土器を作っている状態が見つかっているんですね。右の写真は、焼く前の土器がそのままつぶれて出てきているんですね。生の粘土です。焼く前の土器ですね。

それから、左写真の真ん中の白っぽく見える丸い板は、器台です。円盤に円筒形の台が付いた土器で、以前から土器作りの台だろうと言われていた焼き物です。実際に、このように生粘土と一緒に出てきたのは初めてですから、住居の中で土器を作っていたことが、ここで確認されたということです。ただ、じゃあ屋外で作ってないのかというと、そのような証拠はないので、外で作っていることもあるかもしれないよという解釈です。

縄文土器の作り方は、パンフレット３ページ上に要約しましたが、初めに①素地（きじ）づくりです。素地（そじ）と書いて素地（きじ）と読みます。取ってきた粘土は、そのまま焼くと縮みが大きく割れやすいので、そこに混和材という混ぜ物を加える。よく使うのは砂ですね。大量に砂を入れる。もしくは枯れ草や動物の毛を混ぜ入れる。古い土器片をつぶして入れた場合は橙色の粘土粒に焼きあがる。そうやって素地という土器を作る元を準備するのです。砂は石が砕けたものだから焼いても縮まないので、土器も割れにくくなるのです。もうひとつ大切なのは、砂は川によって顔つき、つまり岩石の種類が違いますから、混和材を分析することによって、これは、ここら辺の土器だとか、この混和材は全然見たことがないとか。他地域から搬入されてきた土器を区別ができるようになります。これを胎土分析といいます。

次、②形を作ります。このパンフレットにあるように、葉っぱとかの敷物の上に円盤状の粘土を置いて、そこに粘土紐を一段ずつ積んでいって形を作るんです。そのときに、例えば石の上にどんと粘土を置いたら、もう動かせないわけですね、粘土は。ですから、葉っぱとか編み物などを敷いて、その上に粘土を置くのです。この敷物については、（スライド36）、パンフレット７ページ上に載せてあります。

③内外面の形を整えて、生乾きになってきたら文様を付けます。火焔土器の把手のように大きな装飾

は、太い粘土紐を組み合わせて立体的に作るのです。縄目などの文様の付け方は、後で説明します。

④仕上げです。内面は乾き切らないうちに、つるつるの石とか貝殻で磨くのです。そうすると目が詰まって水が漏れにくくなります。これをやるかやらないかで全然違います。ですから遺跡の発掘では、こういう小さいつるつるの石が出てきたら、それを疑って必ず取っておくんです。それを実体顕微鏡で見たら、細かな擦痕がいっぱい入っていました。

⑤そして、最後の焼成です。日陰でよく乾かしてから焼きます。言われているのが500から700度ぐらいの低温ですね。この温度分析の方法にもいろいろあるみたいで、例えば黒鉛を胎土に入れる地域があり、700度を超えると黒鉛は変化するものの変わらないままだから、その土器の焼成温度は700度には達していないとか。

粘土採掘坑と保存粘土

（スライド27）を見ましょう。これは粘土採掘抗です。粘土を採った跡。これは最近数か所で見つかっています。先ほど土器作りで触れました縄文中期の多摩ニュータウンNo.245遺跡のすぐ隣で、No.248遺跡という粘土を採掘している遺跡が見つかっています。ここからは約600トンもの粘土が採られ、隣りのNo.245遺跡のムラだけではなくて、あちこちのムラまでも、粘土を供給していたのではないかと考えられています。

そして下段の一番左。これは長岡市の三十稲場遺跡の粘土採掘抗で、６ｍ×４ｍ×深さ３ｍ、下に粘土の層がある穴です。後期の初めくらいで、ちょうど今展示している平遺跡ぐらいの時期になります。最近ですと、写真右上の会津坂下町の竈原遺跡から、非常に質のいい白い粘土の層が見つかっています。縄文後期の中頃と晩期初め頃の、二つの時期に採掘された粘土採掘抗です。全面掘られているのが後期で、この断面が見えている丸い穴は晩期とのことです。そこからは、縁が摩耗した土器片と平らな石のかけらが出ていて、粘土をこそげ取った道具と考えられています。こういう調査事例を覚えておくと、自分が発掘をしたときに気付くので、いろいろな遺跡の現地説明会を見て歩くのはいいと思いますね。

次に（スライド28）、これは保存状態を示す粘土の塊になります。下段の真ん中は新発田市村尻遺跡です。たまたま焼けてしまったと思うのですが、よく観察すると葉っぱの跡があって、さらに、紐をこう回してその葉を留めたような跡が残っています。裏返すと指で粘土をつまみ取った跡も残っています。昔、千葉市の加曽利貝塚博物館が土器の焼成実験をしていたのですが、そのときに「粘土は練ってから、ねかせておくと粘りが出ていい」と聞かされたものですから、これも、ねかせ状態かなと私が報告したものです（田中1991）。右は小千谷市の城之腰遺跡から出土した粘土塊です。これも同じように木の葉で包んだ跡があります。１.33kgです。村尻が１.６kgでした。それから右上、胎内市中条の江添遺跡という縄文時代後・晩期ですが、これは生粘土みたいで、焼けていないのが出ています。重さは不明です。そして上段左は、会津坂下町の鬼渡りＡ遺跡で、深鉢の中に白い粘土が保管されていた状態のようです。

さて、村尻・城之腰遺跡の粘土塊について、全然疑わずに「ねかせ」と書いたのですが、そうしたら、東京都の可児通宏さんが書かれた『縄文土器の技法』の中で否定されました。私は先輩を通して可児さんの業績を教えてもらい、非常に尊敬しているのですが、この本の中で「ねかせなんかあるわけない」と言われています。多摩NT-№248遺跡は良質の粘土なので、いい粘土だったら別にねかす必要はないんだと。ですから私はこのスライド28では、「ねかせ」ではなく、「保存状態の粘土塊」と書いておきました。でも、ねかせがあるかないかは分からないので、もしかしたらあるかもしれないし、ないかもしれない。良質な粘土だから「ねかす」必要がないとは、逆を言えば、良質じゃない粘土の場合どうなるのかという話になるので。ちょっと結論は出ませんけれども。

なお、この本の中で可児さんは、下段左端の写真のような、こういう小さい、ちょっと握ったような跡がある粘土ですが、こういうものは、新しく採ってきた粘土を試し焼きしたんじゃないかと指摘されています。この『縄文土器の技法』という本は、縄文土器の作り方を学ぶうえで、読み易くていい本です。

4　縄文中期の土器

（スライド29）さて、中期です。土器は中期の初めぐらいの平遺跡からの出土です。そして、分布図はひとつ新しい時期で、火焔土器の頃の土器型式の広がりになります。平遺跡の土器は、北陸に中心がある新崎式（にんざきしき）という土器型式が主体になります。特徴は、右の写真で文様を復元していますが、細い竹を半分に割いて、その内面で粘土を引

くんですね。そうすると断面がかまぼこ状の膨らんだ隆線を付けることができます。それをトントンと小刻みに押し引きしながら動かすと、連続の爪形文になります。前期のところで、同じような文様に結節浮線文という名前が付いていましたけれど、結節浮線文は細い粘土を貼り付けて、その上にこの方法で結節を付けます。連続爪形文は、同じ方法なのですが、粘土そのものに押し付け、かつ幅広です。ここで重要なのは、どうも新潟平野の人たちは、北陸から伝わってきた細竹を割った道具を非常に気に入りまして、そのままずっと使い続けるのですね。

馬高式の火焔型土器には、縄文が使われていません。縄文を付けずに、この割った竹で縦方向の平行沈線をいっぱい引いて、その上から棒で沈線をなぞります。竹を使うと、模型写真にあるように、３本の平行線も簡単に引くことができるんですね。中期の中ぐらいになりますと、新潟平野は大木８ａ式という東北系の土器が主になります。会津の大木８ａ式とそっくりなのですが、何が違うかといったら、会津は棒で３本の沈線を引き、新潟では竹を使って３本線をきれいな平行線で引く。そのような違いで、新潟と会津の土器を区別できるんです。新潟で竹を使わない棒沈線の文様の土器が出てくれば、会津から持ち込まれた可能性があります。もちろん胎土も比較してですが。

他の文様の説明をします。左下の写真で、上段真ん中の口縁部は蓮華文という文様です。仏像の台座の蓮華に似ているからです。この左の縦横沈線は格子目文。これは割竹で縦の平行沈線を引いてから、横に細い沈線を入れて描きます。格子目文には斜め方向もあります。それから、左下２個が撚糸文です。撚糸文というのは、棒に撚り紐を巻いて転がした文様です。木目状撚糸文は板目ですね。昔の小学校の木造校舎の床は、こういう木目の板だったのですが。こういう文様や、割竹をいっぱい使う文様は、北陸の特徴になります。それに対して左上の写真は、縄を転がさずにそのまま押しつけた文様です。このような特徴の文様は、東北地方北部からの影響と考えられています。

縄文土器の文様

（スライド30）「縄文」とはどういう意味かと言いますと、縄目の文様ということです。これはエドワード・シルベスター・モースという東京帝国大学に呼ばれたアメリカ人の貝が専門の生物学者が、横浜から新橋まで陸蒸気に乗りまして、そのときに、この大森貝塚を見つけるんですね。鉄道の横でカッティングされた崖に白い貝層があって。日本で初めての発掘調査を1877年に大森貝塚で実施します。その２年後の1879年に、英文、それから日本文で発掘報告書が刊行されます。その中でこの縄目の文様を、cord mark という言い方をしています。これを後に東京帝大の白井光太郎が「縄紋」と訳したのです。糸へんが付いていますね。この縄目の文様は、編んだものを押しつけたんじゃないかと長らく言われていました。それを山内清男が、「これは編み物ではなく、撚り紐を転がした文様だ」ということを昭和６年、1931年に突き止めました。

基本はこれですね、縄目の文様になります。これが縄文です。それから棒に巻いて転がすと撚糸文。（スライド31）に代表的な縄文を示しました。左上が、縄文の一番基本的な文様である単節斜縄文です。撚紐を一回折って撚ると縄になり、その縄をもう一回折って撚ったものを回転させた文様が単節斜縄文です。「節」とはツブツブのことで、ひとつのツブだと単節、節が連なった列のことを「条」と呼びます。そして、文様を付ける道具のことは「原体」と言います。斜縄文は「斜めの縄文」と書きますが、原体を横に転がすと条が斜めに現れるためです。それから右上の写真は、結び目の回転。これはＳ字を連続したようなちょっと変わった文様です。この特徴的な文様は縄文晩期に多いのですが、特に加茂・田上あたりで非常に好まれていて、深鉢の口縁部にこれを何段にも付けています。山内清男は、それを戦前から指摘しているんですね。新潟県のそこら辺には、こういう文様をよく使っているんだと、ちゃんと書いている。

それから、中期初めのところに出てきた木目状撚糸文ですね。撚糸文というのは、撚紐を棒に巻き付けた原体を転がして付けた文様です。巻きつけ方によって、右側の網目状撚糸文など、いろいろな文様を作れます。右下は、縄の側面圧痕と言って、縄を転がさずに押しつけた文様です。１本の撚紐から非常に多くの文様を作ることができるのです。

なお、土器が初めて作られた縄文草創期の前半の土器には縄文を全然使っていません。中期の火焔土器や関東の土器にも縄文を使わない土器が多くありますが、縄文時代の土器なので縄文土器です。

王冠型土器と折衷土器

さて、ここから皆さんお待ちかねの火焔型土器の話しをします。国宝になった火焔型土器ですが、長

岡から十日町・津南にかけて多く出ていますね。（スライド32）です。

基本の形は右下の２個です。これらが馬高遺跡から出ていて、『馬高式とその文化』という長岡市馬高縄文館のパンフレットからちょっと複写した写真です。火焔型土器と王冠型土器という形の違いがあり、合わせて火炎土器と呼びます。型式としては、縄文だけの素紋土器なども含み、馬高式です。

火焔型は、ニワトリのトサカ（鶏冠）のような大きい突起が付き、口縁には細かなギザギザがあります。王冠型は、大きく盛り上がった４個の突起が特徴です。しかし、両方とも下部は同じ文様で一緒、だから下のかけらが出たらどっちかわからない。口縁のギザギザが出れば火焔型土器、こういう突起が出れば王冠という、そんな区別です。

新潟市で出ているのは、この一番左の土器です。王冠型に似ている土器です。類似土器。下半には縄文が付いています。本場の馬高遺跡みたいに、竹管で縦にずらーっと線を入れてないんですね。これはどういう土器かというと、上半分は王冠型をもってきて、下半分は隣にあります大木８ａ式という全面縄文の東北の土器ですね。これら両方の情報を合体させてつくった土器。プロポーションも似ていますよね。右上に火焔型土器のＸ線写真があります。火焔型土器のごてごてした粘土の貼り付けをする前の形で、よく見れば、この大木８ａ式と同じ形をしています。火焔土器の母体は大木８ａ式なのです。そして、そこに北陸から伝わっていた、半分に割った竹管で文様を付けるという技法、それが合体して生まれたのが火炎土器ですね。土器は、このように合体して、折衷というのですが、いろんなものを取り込んで、それがまた次の新しい型式へと変わっていくのです。

火炎土器の本場の信濃川中・上流域に行くと、火焔型土器がいっぱい出ている印象があります。阿賀野市・新発田市あたりでは王冠型ばっかりで、火焔型土器はごく少ないのです。それがまた村上に行くと、火焔型土器が多いんですね。思うには、阿賀野市・新発田あたりは、会津から阿賀野川を通って入ってくる大木８ａ式土器の影響が強くて、なかなかこの火焔型を受け入れないようなイメージが持たれます。それに対して村上まで行っちゃうと、そんなに大木式の影響はあまり受けなくて、海岸沿いを行き来して火焔型もいっぱい受け入れているのかなと、そんな感じがありますね。

ここにメモみたいに書いてありますが、「火炎１割、大木８式ほか３割、素紋６割」と。正確には、７％、30％、63％ですが。これは馬高遺跡のⅧＥ区１号住居の口縁部430点を集計した割合なんだそうです。火炎土器はその中のわずか１割で、大木８ａ式などや在地が３割、そして素紋と書いてありますが、縄だけ転がしたような土器、実用的な土器が半分以上を占めているという。そのような割合で遺跡から出ていますね。ですから、イメージ的には火焔の世界だと火焔ばっかり出てくると思いがちですが、そんなことはなくて割合はすごく少ない。

言われているのは、火焔土器というとゴテゴテした実用的とは思えないような形から、マツリの道具説。また、内面にコゲが付いて煮炊きしているんだから、これは日常使う土器だと。別な見方をすれば、特別なマツリのときの煮炊きで付いたコゲかもしれないのです。その結論は、想像の世界になってしまうみたいですね。

新潟市内の円筒上層式土器

（スライド33）、これは円筒上層式という土器です。青森・秋田・岩手の一部、北海道南部、ここら辺を分布圏とします。普通、何々式という型式名には遺跡の名前を付ける場合が多いのですが、この円筒上層式というのは、体部がバケツみたいでもっと長い形、円筒みたいな形だということで、名付けられた型式名です。円筒下層式は前期です。円筒上層式は新潟市内で３点が採集されています。新津丘陵の秋葉遺跡は一番右、左側ふたつは角田山麓にある大沢遺跡の採集です。非常に特徴的な文様なので、円筒上層とすぐに分かります。新潟県ではほかに、村上市の樋渡遺跡、糸魚川市の六反田南遺跡で出土しています。分布圏は北方ですが、そこから飛び火的に海岸沿いを来ているんですね。

秋葉遺跡の土器の胎土に、新津丘陵にしか出ない高温石英の砂が混和材として入っています。このことは、円筒上層式の形や文様の情報を持っている人が来て、新津丘陵のどこかで作った土器と考えることができるんですね。ですから、土器の胎土や混和材を観察することは、土器やその情報の動きを知ることができることにつながると言えるのです。例えば女の人が嫁いできたときに、そのような情報を持って来たとかも考えられます。ちょっと変わった土器なので紹介してみました。

深鉢の使用痕

（スライド34）で、深鉢を使った痕跡、使用痕の話をします。何度か言っていますが、深鉢はほとんどが鍋として使われているのです。そのために深鍋と言う方もいます。使われた痕跡とは何かというと、ススやコゲといった炭化物です。ススは大体外側、コゲは内側ですね。左側の土器は、煮こぼれが炭化しています。そして、もうひとつの使用痕が赤化で、右側の土器の下半分がオレンジ色になっていますよね。これは火を受け続けたために変色し、もろくなっているのです。外面のススも、強い火を受けると燃えてしまいます。こういうところから、この土器は鍋に使われた、何かを煮たことがわかるのですね。

最初の年代説明のところで、炭化物を分析すると何年前かわかるという、C14年代測定の話をしましたが、もうひとつ、この炭化物の炭素・窒素同位体比分析という方法があるのです。難しいですけれども。この分析では、その炭の由来、どんなものの炭か分かるのだと。分析表を見ますと、左上は、C３堅果類、トチとかドングリとかですね。ジャガイモ、クリも入っています。いわゆる秋の味覚でしょう。下のほうは、C３植物＆動物、サトイモ、エゴマ、ノビル、アズキ、そこにシカ、クマ、タヌキときますが、これはそのような植物を食べた動物が、同じような値になるということですね。それから海産物が右下にいます、サケとかですね。それからC４はトウモロコシとかアワなど。

このように、考古学は土器・石器だけを対象としているのではなく、いろんな学問・分野の研究方法を駆使して、学際的研究と言うのですが、各時代・地域の生活の復元を目指しているのです。

さてもうひとつは、（スライド34）の右中ほどにちょっと書いてありますが「完全な形の深鉢の廃棄」についてです。発掘しますと、深鉢は大量に出てくるんです、いっぱい。それも完全な形の状態なのに、捨てられているのが多い。何でだろうと、みんな疑問に思っていたのですが、明治大学の阿部芳郎さんが、2002年に『縄文のくらしを掘る』という本の中で書いているのは、一見完全な形なんだけれども、土器の下部が炎を受けてオレンジ色に劣化している。この部分の断面を実体顕微鏡で見たところ、中は細かなヒビだらけで、使ったら壊れるほどボロボロだというんですね。ですから、昔の人は、「これは駄目だ、使えないや」と思って捨てちゃうんですね。見た目は完全な形なんだけれども。もう使用に耐えない土器、それがどうも捨てられているのだということを、その断面を顕微鏡で見たことによって、証明しているのです。ちょっと目からウロコでした。

5　縄文後期の土器

ここから縄文後期の土器、（スライド35）です。後期の初め、これは三十稲場式と言われる土器になります。新潟県と会津地方が分布圏です。深鉢の口縁部が外に開いて蓋受けという、蓋が載る形になっていて、全面の刺突文が特徴です。左上の写真が蓋形土器です。

この三十稲場式ですが、右下写真の左側が西蒲区の上ン原遺跡、右側が五泉市馬下稲場遺跡で「まおろしいなば」と読みます。同じ型式でも新旧があり、（スライド９）のように特徴を比較すると変化の様子がつかめます。古い方は上ン原遺跡で、例えば、口縁部の橋状把手、この橋がまたぐような取手ですね。この橋がなくなって、単なる貼付文に変わるのです。そして体部全面の刺突文は、上半だけにしか文様がなくなるのです。その文様も、区画を作ってその中に押し引きで線状の文様を入れる、そう変わります。全体的に何かしら変化していくのですが、かけらが出ても、こっちは新しいとかこっちは古いとかいうことがわかるんです。破片でも区別できる変化であれば、時間差を認識しやすくなります。

右上に土器型式の分布範囲の地図を載せてあります。赤い輪が新潟県中心になっていますけれども、三十稲場と次の南三十稲場式は大体このぐらいの範囲です。新潟平野と会津、山形県置賜地方ですね。十日町・津南の魚沼地方は、信濃川で長野との関係が近いため、ひんご式という北関東から長野にかけての土器の影響を多く受けています。それから青で囲んだのは綱取式で、これは福島、宮城の南のほうです。北陸には気屋式があり、上越地方はこの気屋式とひんご式の分布圏に入ります。このようにして、同じ時期に様々な土器を持っている集団があります。

面白いのが、左下の土器を見てください。三十稲場式と綱取Ⅰ式との折衷と書いてあります。平遺跡の口縁部破片です。口縁部無紋帯の下の、粘土を貼り付けた隆帯の上を刻むやり方は三十稲場式の特徴です。綱取Ⅰ式の特徴は、口縁部無紋帯に三日月状に粘土を貼り付けて、その両端に盲穴というのですけれども、円形の窪んだ穴ですね、これを押す。これが綱取Ⅰ式の特徴です。ですから、この綱取Ⅰ式

と三十稲場式の特徴が同じ土器の中に使われているということは、二つの土器型式が同じ時期だと分かるのです。このように、ひとつの土器の中に違う型式の要素が同居しているときは、折衷土器と言います。

土器底面の敷物圧痕

次は、土器づくりの話しの続きです。土器を作るときに粘土は敷物の上に置く話しをしましたが、その敷物について少し詳しく説明します。（スライド36）です。

まず、右上の写真は広葉樹や草の葉です。これらは先月、弥生館の辺りにあるものを急ぎ採ってきて押し葉にし、それをラミネートフィルムでパックしたものです。カラムシは聞いたことがありますか。茎から繊維を取って、小千谷縮だとか十日町紬の糸になるのですが、十日町のそば屋に行くと、このカラムシの若い葉を天ぷらにしています。上段左です。真ん中がホウの葉、右がササ、下段右がクズの葉、それから下段左がクサギです。クサギは先端が切れています。クシャクシャにもむと臭いのでクサギです。それからササは、北陸から東北の寒い地域で、多く使われているようです。

土器の底に、敷物の圧痕が付いています。左下は、もじり編みというスダレ状の編み方ですね。ゴザを編んだりするやり方です。右の３点は網代編みです。右下写真は、それぞれの復元で、もじり編みはカラムシ、網代はマタタビの茎を裂いて編みました。土器底面の圧痕はネガ状態なので分かりにくいです。油粘土で型を取ると、もともとの形が現れるので、どういうふうに編んだかが分かりやすいということです。

さて新潟県の場合、中期の初めぐらいはスダレ状が多く、中期の中ぐらいからは、木の葉やササが多い。中期終わり頃の新発田とか阿賀野市辺りですと、なぜか網代をわざわざ消すんですね。きれいに消されていると敷物があったかどうかわからないけれども、消し忘れがあって部分的に残っている網代を見たら、「あ、これ消しているな」と。そういった目で見ると、消しているのがいっぱい見つかるのです。それが後期の中ぐらいからは、網代が多くなって、逆にこの網代をわざわざ目立たせるようになります。このように、土器の敷物でも、それぞれの作る集団や時期によって、好みとか違いが出てくいるんですね。（スライド14）の村尻遺跡、弥生時代中期の再葬墓の土器も、網代・葉・ササの圧痕が付いていますし、弥生後期では織物の布を敷いている例があります。

６　縄文晩期の土器

晩期になります。縄文時代最後の時期、（スライド37）です。大沢谷内遺跡とそのすぐ北の大沢谷内北遺跡が、晩期の大きな遺跡です。この分布図の緑色で囲っている範囲、上野原式と鳥屋式ですが、赤線の亀ヶ岡式土器の分布圏と重なり、両方の土器が一緒に出ます。

上野原式というのは三条の遺跡で、北区の鳥屋遺跡が鳥屋式の標識遺跡です。

編年対比表の左のほう、新潟県の上から３番目、上野原式というのがあって、その下に鳥屋１式、２ａ・２ｂ式とあります。右の東北地方を見ると、大洞Ｃ２、Ａ１、Ａ２式が対応します。これが、大沢谷内遺跡・大沢谷内北遺跡の時期になります。

一番下の写真、大洞Ｃ２式の浅鉢があって、隣に上野原式の浅鉢があります。ほぼ同じぐらいの時期になります。違いは、上野原式では、この眼鏡状隆帯というんですけれども、文様の上の方に粘土の帯を巡らして、そこをテンテンと窪ませて、連続した楕円みたいなものを付ける。これが上野原式の特徴ですね。あと三角の模様を擦り消していますけれども、こういう地元の上野原式土器が、東北の本場の亀ヶ岡式土器と一緒に出てきます。それから１番左は鳥屋２式で、これは甕と言われている形ですけれど、口縁部が幅広で、体部の上の方が膨らむ形ですね。こういう新しい形が出てきます。

深鉢の形と使い分け

後期の中ぐらいを境にして、深鉢の形や作り方が大きく変わります。（スライド38）の写真を見ますと、後期初めのほうは割合に寸胴に近いような形になっていますが、右の晩期では底部が小さくて直線的に斜めに立ち上がり、口縁部が大きく開く形になります。こうすると体部下半に当たる火が広い範囲に当たりやすくなる。熱効率が上がるんです。なおかつ非常に薄く作ることができるようになっています。そして、右上の枠線の中ですね、精製土器と粗製土器ってありますけれども、この精製・粗製の区別は、薄く作ってきれいな文様つける浅鉢や台付き鉢、香炉形土器･注口土器などの食卓にあがったり、特別な用途の土器が精製土器になります。それに対して粗製土器は、粗製といっても雑に作っているわけではなくて、ちょっと文様の付け方があまりきれ

いじゃないくらいの、煮炊きに使うナベがほとんどです。この違い、これは後期の中ぐらいの加曽利B式と言われる頃から作り分けがはっきりします。

では、もっと古い時期はどうかといったら、下にありますが、意匠文系土器と素文系土器とに分けられています。これは阿部芳郎さんが『駿台史学』で書いています〔阿部1998〕が、文様をいっぱい付けている土器と、縄文だけの土器との違いですね。ですから、薄く丁寧に作るとかの違いではないのです。文様の違いだけです。でも、その違いも当時は意味があったのでしょう。さて意匠文は分かるのですが、この素文を辞書で引くと、素文（そぶん）と出るんです。ソブンというのは漢文で、返り点やレ点とかの付かない文に対して言うのだそうです。ですからこれだと素文（そぶん）系土器になってしまいますから、私はむしろ、紋、糸へんの紋を付けて、素紋（すもん）系土器、こっちがいいなと。後期よりも古い土器については、意匠文系土器に相当する有紋土器という言い方も使われています。

それから、深鉢内面に付着した炭化物の窒素と炭素の同位対比分析については、（スライド34）で食材の同定ができると言いました。ここでは、窒素と炭素の同位対比と深鉢の大きさを比較し、煮る対象によって土器の大きさを使い分けているという考察がされています〔阿部ほか2021〕。この中では、炭素と窒素が多いと動物で、炭素が多くて窒素が少ないと植物質ということが書かれています。そして、大型の粗製深鉢は、ドングリなどのアク抜きに使ったんじゃないか。中型の深鉢は、混じった数値が出てくるので、日常の煮炊きなど多用途に使ったんじゃないか、と分析結果を解釈しています。また、東日本では、晩期は粗製土器が非常に多いということも言っています。

土器実測図のしくみと描き方

時間となりましたが、今回の展示で私が一番やりたかったのが、（スライド39）にある土器はどのように実測するかという模型セットです。複製した土器を縦方向４分の１に切って、土器のどの部分が実測図ではどこに描かれるのかを示しました。本物の土器は右奥に置いてあります。当たり前のことですが、一般の方は実測図の約束事が分からないため、その見方の紹介も兼ねています。図面の左側には、外面の文様が描かれ、右側には内面の調整が描かれています。そして黒く塗った部分は断面です。詳しくは展示解説パンフレットに記載してあります。どのように計測し方眼紙に書き込んでいるのかを、ぜひ展示会場でご覧になってください。

以上、これで私の発表を終わります。一応やさしく説明するつもりではいたのですが、結果は皆さんの評価にお任せいたします。どうもありがとうございました。

参考文献一覧

阿部芳郎1998「縄文土器の器種構造と地域性」『駿台史学』102

阿部芳郎2002『縄文のくらしを掘る』岩波ジュニア新書

阿部芳郎・栗島義明ほか2021「縄文土器の作り分けと使い分け」『日本考古学』第53号　日本考古学協会

可児通宏2005『縄文土器の技法』同成社

石川日出志2001「土器の実測とは何か」『考古学において遺物の実測とは何か』考古学技術研究会

小林謙一2017『縄紋時代の実年代』

佐原　眞1987「考古学をやさしくしよう」『京都府埋蔵文化財論集』第１集　京都府埋蔵文化財調査研究センター

佐原　眞1974「一括遺物・遺物変遷の順を追う」『古代史発掘５』講談社

佐原　眞1994『遺跡が語る日本人のくらし』岩波ジュニア新書

田中耕作1992「奈文研専門研修「縄文時代遺跡調査課程」に参加して」『新潟考古学談話会会報』第10号　新潟考古学談話会

田中耕作2004「考古学の用語と文章ことば」『新潟考古学談話会会報』第28号

松永篤知2008「網代・敷物」『総覧縄文土器』アムロプロモーション

山内清男1930「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』第１巻第３号

スライド 1

考古学をやさしくしよう

佐 原　眞　昭和7(1932)年～平成14(2002)年
（奈良国立文化財研究所・国立歴史民俗博物館）

・考古学をやさしくしよう　・考古学を楽しくしよう
・学問の成果をいかにやさしく一般市民に還元するか
（学術用語・略語・記号 ⇒ 研究の場で）

・日常用語におきかえる
・聞いて分かる用語を使う
・解説を加える
・ただし、学術用語を完全に排除した説明や解説は不可能

今回の展示‥‥学術用語の言い換え、日常語。対象は中学生以上
展示解説パンフレット‥‥ 一般の方と専門の双方に配慮。ただ字が小さい
本日の講演‥‥ 深く知りたい一般の方、若手の研究者向け

スライド 2

難解な考古学の専門用語

- 遺跡‥‥‥集落・生産（窯・製鉄）・埋葬・祭祀・洞窟・
(性格)　低湿地・水中・都市・軍事

- 遺構‥‥‥竪穴住居・掘立柱建物・炉・土坑（貯蔵・墓・
掘る・盛る　落し穴）・埋設土器・貝塚・古墳・堀・溝・
環状列石・盛土遺構・環濠・土塁・井戸・窯

- 遺物‥‥‥道具と、人骨・食糧残さ（骨・貝・種実）
材質⇒ 土器・石器・骨角器・木器・金属器
用途⇒ 鉢・甕・鍋・注口土器・斧・弓・石鏃・
石錐・釣針・土偶・装身具・銭・丸木舟

・学術用語‥‥型式・様式・類型・編年・層位・系列・遺棄

スライド 3

今日の話のながれ

1 縄文時代とは
・土器は時代のモノサシ　・土器型式と編年　・土器の新旧と同時
2 新津丘陵の縄文遺跡
・土器の分布圏　・土器の形と部分の呼び方
3 縄文前期
・土器づくり
4 縄文中期
・縄文土器の文様　・王冠型土器と折衷土器　・深鉢の使用痕
5 縄文後期
・土器底面の敷物圧痕
6 縄文晩期
・深鉢の形と使い分け　・土器実測図の仕組み

スライド 4

縄文時代とは

・土器の生成‥‥‥約16500～15500年前
・縄文時代‥‥‥‥約13000年間続く
狩猟・採集(ドングリが主食)・漁労

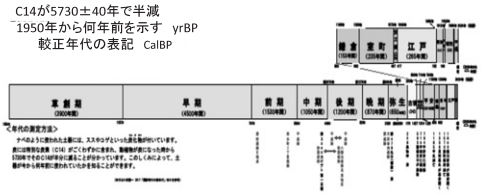
・時期区分‥‥‥草創期・早期・前期・中期・後期・晩期
細分（初頭・前葉・中葉・後葉・末葉）⇒言い換え
・草創期 ‥‥‥ 最終氷河期、旧石器的な道具箱、遊動生活
・定住生活‥‥‥早期になると温暖化、縄文文化の諸様相
大集落、貝塚、ﾄﾞﾝｸﾞﾘ貯蔵、墓域、多器種土器
弓矢や多様な石器、大型の石皿、マツリの道具

スライド 5

土器は時代のモノサシ

縄文土器が初めて作られたのは約15500年前(16500年説もある)
現在(西暦2020年)まで約13000年　縄文時代が84%

AMS放射性炭素年代測定法
C14が5730±40年で半減
1950年から何年前を示す　yrBP
較正年代の表記　CalBP



スライド 6

土器型式と編年

- 土器型式
形や文様などが共通する土器のまとまり
一定の広がりと一定の時間幅（地方差・年代差）
「このような形や文様、整形方法で作らなければならない。」
という地域での約束事

- 土器編年
土器を新旧で順序よく並べたモノサシ（相対年代）
放射性炭素年代測定(C14年代)の併用 ⇒ ○○年前の土器
一緒に出た石器や住居跡の時期を知る
土器は大量に作られ、生活に密着

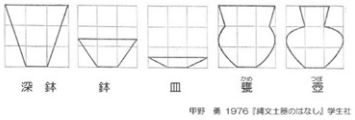
スライド 7

縄文土器の形と部分の呼び方

・陶磁器の呼び方から
口縁部・体部(胴部)・底部

・口縁部
直立・内傾・内湾・外傾・外反
口唇 ⇒口端の変容（山内1930）

・縄文土器の基本形



甲野　勇 1976『縄文土器のはなし』学生社

スライド 8

土器の見方
（要素に分解して比較）

表徴:
その型式を特徴づける鍵の要素

菅生田	特 徴	権現山
○	頸部のくびれた形	×
○	口頸部無紋帯	×
○	頸部のキザミ隆帯	×
○	4単位の橋状把手	×
×	体部の全面刺突文	○
三十稲場式である	判 断	三十稲場式とは言えない

上ン原遺跡（西蒲区）
三十稲場式 標準

菅生田遺跡（宮城県）

権現山遺跡（愛知県）

スライド 9

土器の新旧と同時

(1) 層位学的方法
地層累重の法則・・・水平堆積は下層が古く、上層が新しい（地質学）
地層同定の法則・・・遠く離れても同じ層（火山灰）

(2) 型式学的方法
土器の変化をつかむ
本来のものがだんだん崩れてくる。役割を失う。発展していく（？）
折衷土器・・・・別々の型式の文様が、ひとつの土器に使われる。同時期

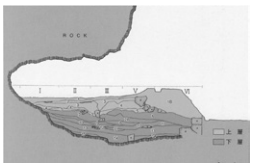
(3) 一括遺物
一括遺物：同時に埋めた(埋まった)ひとまとまりの遺物。共伴出土
共伴出土は「出土の同時」であり、「製作の同時」ではない
共存の同時性：たまたま⇒暗示⇒蓋然性⇒確実性（佐原は5回共存で）
土器の出土状態 ⇒遺構内共伴と遺構の切り合い 同時か、新旧か

スライド10

(1) 層位学的方法

・層位の基本 ⇒水平堆積の層は、上層が新しく、下層が古い。
・見えない(認識できない)土層の乱れ、ピット(小穴)

「土層は生では使わない」・・・・・混入を前提（山内清男）
（田中耕作1992『新潟考古学談話会会報』10号 ）

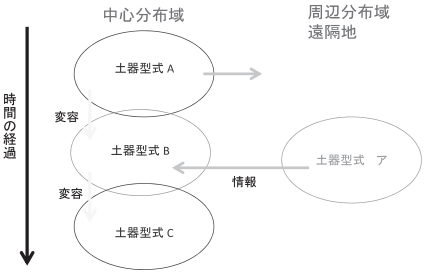


阿賀町 室谷洞窟（小熊博史2007）

東北大学1995『中沢目貝塚Ⅱ』宮城県

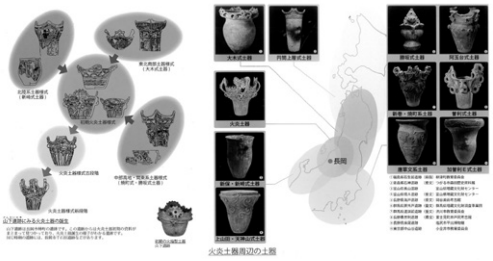
スライド11

(2) 土器型式（時間と空間）



スライド12

火炎土器の成立と周辺地域の土器

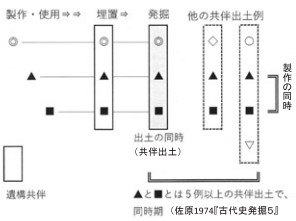


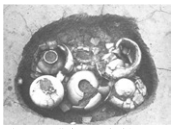
長岡市教委2010「火焔土器と馬高・三十稲場遺跡」

スライド13

(3) 一括遺物の考え方

製作の同時と,出土の同時(共伴出土)
一括遺物⇒同時に埋めたもの・残されたもの




弥生時代の墓坑 ＜一括遺物＞
新発田市教委1982『村尻遺跡Ⅰ』

縄文時代晩期の土坑 ＜一括遺物＞
新発田市教委1982『村尻遺跡Ⅰ』

スライド14

土坑の共伴出土（古い土器も一緒に埋置）

新発田市教委1992『館の内遺跡D地点の調査』

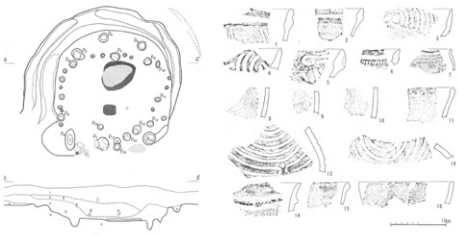
縄文晩期後半の編年

新潟県埋文調査事業団2002『川辺の縄文集落』

スライド15

竪穴住居の土器破片出土

住居の窪みを埋めた土に含まれていたと解釈
⇒一括遺物ではない


平遺跡１号住居（後期初め頃） 新津市教委1983

スライド16

住居の炉の共伴出土例（入れ子の土器）

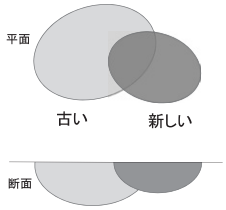
縄文中期終わり頃の竪穴住居（西方前遺跡）

炉の埋設土器が入れ子（上下を切断した土器）
⇒ 住居が使われていた時期を示す

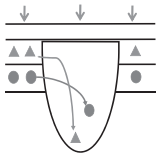
（福島県三春町教委1992『西方前遺跡Ⅲ』）

スライド17

遺構の新旧関係



土層の逆転



遺構の切り合い
後から掘った穴が、埋まっていた
古い穴を壊している

・埋置・埋納（目的・意識）
廃棄・土に混在（偶然・無意識）
置き忘れ・災害（遺棄）

スライド18

新津丘陵の縄文遺跡

・新津丘陵の北部
標高95～110mの里山
・東に阿賀野川 西に信濃川

・丘陵上の遺跡 (標高15～22m)
丘陵先端の平坦地
平地との高低差10～15m
縄文前～晩期

・平地の遺跡
縄文晩期（大沢谷内遺跡）

地形図は、大日本帝国陸地測量部 昭和9年(1934)発行

スライド19

秋葉遺跡（縄文時代　中期初め～後期初め頃）

- 丘陵先端の平坦面～緩い斜面
- 標高 20～22m
- 平地との比高差 15m
- 調査：1998（平成10）年から13次
- 住宅建築・駐車場造成など小規模
- 竪穴住居・石囲炉（後期）
掘立柱建物・土坑

スライド20

平遺跡（縄文時代　中期初め頃・後期前半）

- 新津丘陵東側緩斜面
- 標高 15～21m
- 平地との比高差 10m
- 調査：1981（昭和56）年
2020（令和2）年
- 竪穴住居（中期初め・後期初め頃）
石錘・土錘（おもり）多い

穴の中に置かれた土器

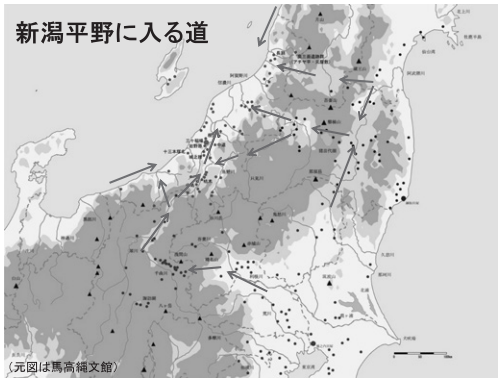
スライド21

大沢谷内遺跡（縄文時代　晩期後半）

・新津丘陵から西へ約1km
・地表の標高 4m
・調査面は地表から1m下
・調査：2005（平成17）年から
2016（平成28）年　25次
・天然アスファルトの精製
・一時滞在のムラ（生活に必要な石器の種類や量が少ない、
粗製深鉢が大多数で他の器種少、マツリの道具なし）
・物々交換の港？周辺は湿地帯。現信濃川は西へ1.5km

スライド22

新潟平野に入る道



（元図は馬高縄文館）

スライド23

土器の分布圏

- 中心分布域と周辺分布域（土器分布圏）
- 遠隔地（飛び火的出土）

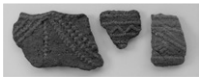
- 交通路（交易・交換）⇒大きな河川
信濃川・阿賀野川・荒川・日本海

- 搬入土器の認識　⇒土器の移動・情報の移入
- 地域間のつながり・交流（人・情報）
- ヒスイ・黒曜石・アスファルト・干し貝（交易品）

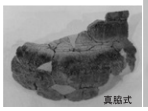
スライド24

縄文前期の遺跡

居村E遺跡（前期初め頃：布目式）

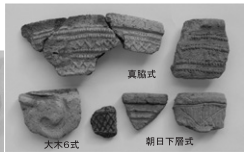


新発田市二タ子沢A遺跡（前期終わり頃：真脇式）



華水2丁目窯跡
（前期終わりごろ）

真脇式

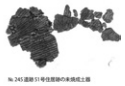


大木6式　朝日下層式　真脇式

スライド25

縄文土器の作り方

① 素地作り・混和材を混ぜて練る。
② 形作り　・粘土ヒモを積んで形を作る。内外面を整える。
③ 文様づけ・立体的な装飾は太い粘土ヒモ。
④ 仕上げ　・生乾きの時に、ツルツルの石や貝殻で磨く。　⑤ 焼　成　・日陰で乾かし、500～700度くらいで野焼き。



多摩NTーNo245遺跡　51号住居内の土器つくり

<参考文献>
可児通宏2005『縄文土器の技法』同成社

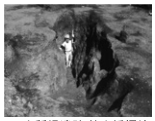
(東京江戸東京博物館2021『東京に生きた縄文人』)

スライド26

粘土採掘坑

竈原遺跡（後期中頃と晩期中頃）
三十稲場遺跡（後期初め頃）
多摩NTーNo248遺跡（中期中頃）

竈原遺跡 粘土採掘坑
(会津坂下町教委2021)



三十稲場遺跡 粘土採掘坑
(長岡市教委 2010)

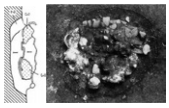
多摩NTーNo248遺跡　粘土採掘坑
(東京江戸東京博物館2021『東京に生きた縄文人』)

スライド27

保存状態の粘土塊

・生粘土・焼粘土
・混和材の有無
・出土位置

・陶芸の「ねかせ」はあるのか？



会津坂下町鬼渡りA遺跡
(土器内保存)

江添遺跡(生・不明)
24.2×20.2×10.7cm

・粘土の試し焼き？
⇓(by 可児2005)

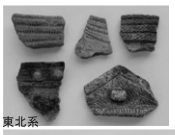
村尻遺跡 (焼・混)

村尻遺跡(焼・混) 1.61kg
14.0×13.3×9.8cm

城之腰遺跡(半生焼・無)
1.33kg 15.0×14.0×6.3cm

スライド28

縄文中期の遺跡



東北系

北陸系　中期初め頃（平遺跡）

竹管文と連続爪形文

スライド29

縄文土器の文様

「縄文」という名称
E.S.モース「大森貝塚の発掘調査報告書（英文）」1879年
cord mark（縄目の文様）⇒白井光太郎が「縄紋」と訳す

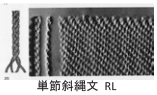
山内清男が撚紐(ヨリヒモ)の回転圧痕と突き止める　1931年

縄目以外の文様（貝殻　押型文　棒状工具など）

縄文　木目状撚糸文　竹管文　連続爪形文　条線文　網目状撚糸文

スライド30

「縄文」＝ 撚紐(ヨリヒモ)の回転文様

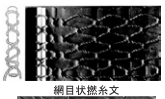


単節斜縄文 RL

結節（結び目）の回転

<基本>単節斜縄文
2回撚る
右撚り・左撚り
転がす→45°傾く

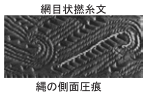
木目状撚糸文



網目状撚糸文

撚糸文
（軸に撚紐を巻く）

羽状縄文



縄の側面圧痕

佐原 眞1981「特論 縄文施文法入門」『縄文土器大成3』

スライド31

王冠型土器と折衷土器

馬高式　火炎土器　火焔型土器
(素紋)土器　王冠型土器

大木8a式を母体
キャリパー状の器形・鶏頭冠突起
横S字状文・刺先状文

構成⇒火炎1割・大木8式ほか3割・素紋6割

火焔土器のX線CT
（新潟県立歴史博物館2004「火炎土器の研究」）

王冠型類似土器
（秋葉遺跡）

大木8a式土器
（新発田市上車野E遺跡）

火焔型土器 重文
（馬高遺跡）

王冠型土器 重文

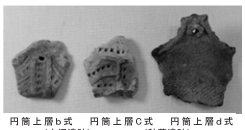
解説リーフレット「馬高式土器とその文化」長岡市馬高縄文館2019

スライド32

新潟市内の円筒上層式土器

秋葉遺跡（秋葉区）円筒上層d式
大沢遺跡（西蒲区）円筒上層b・c式

樋渡遺跡（村上市）円筒上層b式
六反田南遺跡（糸魚川市）円筒上層d式



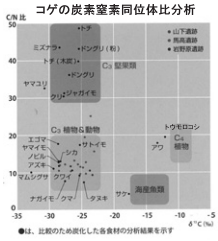
円筒上層b式　円筒上層C式　円筒上層d式
（大沢遺跡）　（秋葉遺跡）

スライド33

深鉢を使った痕跡（使用痕）

炭化物(スス・コゲ)と橙色化(赤化) ⇒ 煮炊き(ナベ)

コゲの炭素窒素同位体比分析



（長岡市2010「火焔土器と馬高・三十稲場遺跡」）

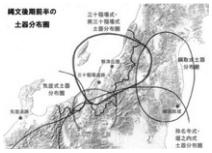
完全な形の深鉢の廃棄
⇒ 見えない劣化
阿部芳郎2002「縄文のくらしを掘る」

新発田市石田遺跡（中期終わり頃）　秋葉遺跡（中期後半）
吹きこぼれの跡　下1/3が橙色化

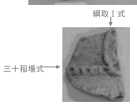
スライド34

縄文後期の土器

・中期終わりから後期初め⇒ 寒冷化
食料調達・居住環境の変化



平遺跡
蓋形土器



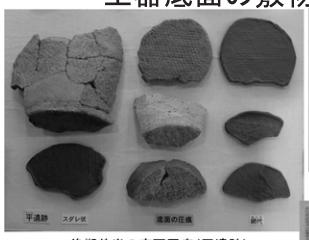
三十稲場式と綱取Ⅰ式の折衷
（平遺跡）

西蒲区 上ン原遺跡
三十稲場式(古)

五泉市 馬下稲場遺跡
三十稲場式(新)

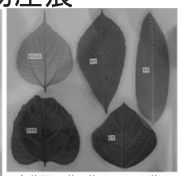
スライド35

土器底面の敷物圧痕

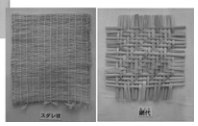


後期前半の底面圧痕（平遺跡）

中期初め頃：スダレ状が多い
中期中頃から：木葉・ササが多い（多雪地帯）
中期終わり頃の阿賀北：敷物圧痕をナデ消す
後期から：網代が多くなる



広葉樹の葉　草やササの葉



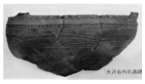
もじり編み(カラムシ)　網代編み(マタタビ)

スライド36

縄文晩期の土器

土器型式の編年対比

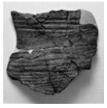
	新潟県	東北地方	長野県
前葉		大洞B式	
		大洞BC式	佐野Ⅰa式
中葉	朝日式	大洞C1式	佐野Ⅰb式
	朝日式	大洞C2式(古・中)	佐野Ⅱ式(古・中)
	上野原式	大洞C2式(新)	佐野Ⅱ式(新)
後葉	鳥屋1式	大洞A1式(古)	女鳥羽川式
	鳥屋2a式	大洞A1式(新)	氷Ⅰ式(古)
	鳥屋2b式	大洞A2・A'式	氷Ⅰ式(中・新)



大洞C2式（浅鉢）
（大沢谷内北遺跡　左3点）

上野原式（浅鉢）

上野原式（広口壺）
（大沢谷内遺跡）



鳥屋2式（甕）

スライド37

深鉢の形と使い分け

後期中頃 ⇒ 形や作り方が大きく変わる
小さな底部・大きく開く体部・薄い壁
炎の当たる面積が増え,熱効率が上がる

精製土器と粗製土器
（後期中頃：加曽利B式から）
意匠文系土器と素文系土器
（後期初め：堀之内Ⅰ式以前）
（阿部芳郎1998『駿台史学』102）
素文(ソブン) ⇒素紋系と使いたい

炭化物の分析（炭素と窒素の同位体比）
（阿部芳郎ほか2021『日本考古学』53）

炭素(多),窒素(多)⇒動物質
炭素(多),窒素(少)⇒植物質
炭素(少),窒素(少)⇒無機質

大型の粗製深鉢 ⇒アク抜き
中型の深鉢 ⇒日常の煮炊き

東日本の晩期
大型の粗製深鉢が7～8割

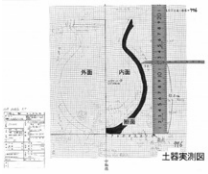
平遺跡（後期初め頃）

大沢谷内遺跡（晩期中頃）

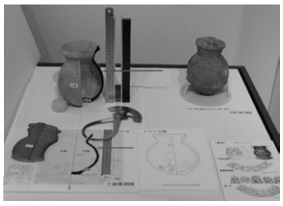
スライド38

土器実測図の仕組みと描き方

実測図の目的
・作った技術や使った状態などの情報を記録・保存
・実物を直接見られない人に伝えること



石川日出志2001「土器の実測とは何か」考古学技術研究会



スライド39

写真・図出典一覧

スライド１・20・21上・右下・22・32：新潟市教育委員会提供、一部加筆
スライド８左上：新潟市教育委員会2020『大沢谷内遺跡Ⅵ 第15･17･19次調査』
スライド８右上：田口昭二1983『美濃焼』ニュー・サイエンス社
スライド８下：甲野勇1976『縄文土器のはなし』学生社
スライド９右上：巻町1994「上ン原遺跡」『巻町史』資料編１考古
スライド９左下：宮城県教育委員会1982『東北自動車道遺跡発掘調査報告書Ⅶ 菅生田遺跡』
スライド９右下：早野浩二2005「権現山遺跡出土の三十稲場式土器」『考古学フォーラム』18
スライド11左：小熊博史2007『縄文文化の起源をさぐる：小瀬ヶ沢・室谷洞窟』新泉社
スライド11右：東北大学文学部考古学研究会1995『縄文時代晩期の研究２：中沢目貝塚Ⅱ』
スライド13：長岡市教育委員会2010『火焔土器と馬高・三十稲場遺跡』
スライド14左：佐原眞1974「遺物の変遷の順を追う：形式学的方法の原理」『古代史発掘５』講談社
スライド14右上・右下：新発田市教育委員会1982『村尻遺跡Ⅰ』
スライド15左：新発田市教育委員会1992『館ノ内遺跡Ｄ地点の調査』
スライド15右：新潟県埋蔵文化財調査事業団　新潟県教育委員会2002『川辺の縄文集落：シンポジウム「よみがえる青田遺跡」資料集』
スライド16：新津市教育委員会1983『平遺跡緊急発掘調査報告書』
スライド17：三春町教育委員会1992『三春町文化財調査報告書16：西方前遺跡Ⅲ』
スライド21左下・25・29・30・33～39：筆者撮影
スライド23：馬高縄文館のものに加筆
スライド26・27下段中央・下段右：東京都埋蔵文化財センター・東京都江戸東京博物館（編）2021『東京に生きた縄文人』
スライド27右上：会津坂下町教育委員会2021「竈原遺跡」『会津坂下町内遺跡発掘調査報告書Ⅷ』
スライド27下段左・34左：長岡市教育委員会2010『火焔土器と馬高・三十稲場遺跡』
スライド28上段中央：会津坂下町教育委員会1989『中丸遺跡　鬼渡りＡ遺跡』
スライド28上段右：新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団2005「江添遺跡」『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅸ』
スライド28下段３点：田中耕作1991「村尻遺跡出土の「ねかせ」状態の焼粘土塊について」『北越考古学』第４号　北越考古学研究会
スライド31：写真佐原眞1981「特論　縄文施文法入門」『縄文土器大成３』講談社
スライド32右上：新潟県立歴史博物館2004『火炎土器の研究』同成社
スライド32：新発田市教育委員会提供
スライド32下段右２点：馬高縄文館2019『馬高式土器とその文化』展示解説リーフレット
スライド39左：新潟市文化財センターのものに加筆

第２章　企画展の概要と企画展関連講演会アンケート結果

令和３年度は、史跡古津八幡山　弥生の丘展示館で企画展を３回開催した（企画展１～３）。なお、企画展２については、（公財）新潟県埋蔵文化財センター（以下、県埋蔵文化財センター）との共催事業として開催した企画展であり、県埋蔵文化財センターを第１会場、弥生の丘展示館を第２会場として実施した。

また、企画展の期間中には、外部から講師をお招きするなどし、関連講演会（第１章に収録）を２回実施したほか、市文化財センター企画展担当職員による展示解説を行った。なお、関連講演会は県埋蔵文化財センター研修室と市文化財センター研修室で行ったが、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、会場の定員を減らしたほか、オンラインでの配信も行った。当日はマスクの着用や受付での検温・アルコール消毒、会場内の換気などの対策を講じた。

各講演会では参加者を対象にアンケートを実施した。アンケート結果については（２）に収録した。

（３）には、企画展１で速報展示を行った令和２年度の古津八幡山遺跡の発掘調査写真を掲載した。

以下、企画展及び関連講演会の概要と、関連講演会のアンケート結果などについて記す。

（１）令和３年度「史跡古津八幡山　弥生の丘展示館」企画展の概要

（Ａ）企画展

企画展１　「古津八幡山遺跡発掘調査速報展
－令和２年度の発掘調査成果－」

開催期間　令和３年４月27日（火）～９月５日（日）
会　　場　史跡古津八幡山　弥生の丘展示館
概　　要　史跡古津八幡山遺跡では、史跡をより適切に保存・活用していくため、史跡外における遺跡のさらなる状況把握を目的とした発掘調査を行っている。

令和２年度は、標高約25mの史跡指定地外において発掘調査を行い、古津八幡山遺跡で最大の大型竪穴建物の内部構造などが明らかになった。この建物は弥生時代から古墳時代へと移行する社会の激動期を反映したシンボル的な建物であったと考えられる。

企画展では大型竪穴建物から出土した土器や鉄器、石器など約100点のほか、調査写真やイラストなどを展示し、調査成果について速報展示・解説を行った。

なお、令和３年度は、この大型竪穴建物の北西約150mの場所で遺跡内最大の方形周溝墓が新たに１基発見され、内部には３基の埋葬施設も確認された（表紙写真）。調査成果については、今後も速報で公開していきたい。

展示解説　令和３年５月23日（日）13：30～
市文化財センター職員

企画展２　「倭国大乱～律令国家成立までの越後平野」

開催期間　令和３年９月14日（火）～12月12日（日）
会　　場　史跡古津八幡山　弥生の丘展示館
概　　要　県埋蔵文化財センターと弥生の丘展示館の２館が共催して実施した初の企画展である。対象時期は、倭国を卑弥呼が治めたとされる弥生時代後期から国家が成立する７世紀まで。越後平野は、西側から情報やモノが伝播する日本海側最北の地である一方、北海道あるいは東北北部など北方の情報やモノが分布する最南の地でもあり、さまざまな地域の情報やモノが伝わってきた。

本企画展では、越後平野の遺跡や出土品を展示・紹介するとともに、それらを通して国家形成段階の激動期における越後平野の重要性について解説した。

展示遺物は土器を中心に土製品、石器・石製品、木製品、金属製品など、両会場合わせて約500点であった。両館の展示スペースは広いとはいえないため、共催することで企画に沿った資料をより多く展示することができた。また見学者も近くでより多くの資料を見て学習することができた。

なお、広報面では両館が同じ企画展をそれぞれ広報することでの相乗効果や、費用面での削減が期待された。共催のメリット・デメリットについては今後詳細な分析を行い、さらなる連携事業に活かしたい。

展示解説　令和３年10月17日（日）15：45～
11月28日（日）13：30～
市文化財センター職員

企画展３　「新津丘陵の縄文遺跡
～文様と形のうつり変わり～」

開催期間　令和４年１月５日（水）～３月27日（日）
会　　場　史跡古津八幡山　弥生の丘展示館
概　　要　縄文時代は約15500年前に初めて土器が作られ、植物採集と狩猟･漁労による生活が約13000年間続いた。

その後の弥生時代から現在までが約2500年間であることと比べると、縄文時代が５倍もあっていかに長く続いたかがわかる。

縄文土器には、使う目的によって深鉢や浅鉢、壺などの形があり、地域ごとに決められた文様が付けられていた。それらは時間の経過とともに変化していく。

新津丘陵では、田んぼや平地を見下ろす丘陵の平坦地から､縄文時代の遺跡が点々と見つかっている。本企画展では、新津丘陵の縄文遺跡から出土した縄文時代前期から晩期の土器に焦点をあて、地域の伝統や使用目的に応じてつくられた縄文土器の文様や形、製作技術が、時間の経過とともにどのように変化していったのかを展示・解説した。

展示解説　令和４年２月13日（日）13：30～
市文化財センター職員

（Ｂ）企画展関連講演会

企画展２関連講演会（第１回）

演　題　東海からみた邪馬台国時代の新潟－登呂の洪水以後の東日本－
演　者　篠原和大氏(静岡大学人文社会科学部教授)
日　時　令和３年10月17日（日）13：30～15：30
会　場　県埋蔵文化財センター研修室
人　数　65名（会場36名・オンライン配信29名）

企画展３関連講演会（第２回）

演　題　新津丘陵の縄文遺跡～縄文土器の形と文様の変化～
演　者　田中　耕作（市文化財センター）
日　時　令和４年２月６日（日）　13：30～15：30
会　場　市文化財センター研修室
人　数　70名（会場25名・オンライン配信45名）

企画展２　ポスター

企画展１　ポスター

企画展３　ポスター

（2）企画展関連講演会アンケート結果

アンケートは各講演会ごとに実施した(44頁)。2回分の講演会のアンケート結果を合計した表・グラフは43頁に掲載した。

なお、2回とも会場の他にオンライン配信による聴講も行っており、オンライン配信での聴講は2回合わせて74名であった。オンライン配信の聴講者にはアンケート調査を実施していないため、本結果には含まれていない。今後、オンラインでの聴講者にもアンケートを実施する方向で検討していく予定である。

年齢　講演会参加者の年齢構成は､70代が最も多く、次いで60代、50代と続く。昨年度の講演会で4名いた20代がいなくなった一方、20歳未満が1名いた。これまで同様、若年層の参加が少ない傾向が続いている。

住まい　参加者の居住エリアについては、近年もっとも多かった市外が減少するとともに、県外も激減した。これまで3～4割を占めていた市外・県外の割合は、今年度は2割に満たなかった。他方、オンライン配信では市外・県外の方も多く、新型コロナウイルスの影響を受けた結果といえる。

市内参加者については、第2回講演会場である市文化財センターのある西区が最も多く、展示会場である弥生の丘展示館や、第1回講演会場である新潟県埋蔵文化財センターのある秋葉区が続いた。

交通手段　交通手段はこれまでと同様、圧倒的に自家用車が多い｡講演会場の県埋蔵文化財センター(第1回）や、市文化財センター（第2回）は、バス等の公共交通機関が非常に限られており、それを反映した結果といえる。

弥生の丘展示館来館回数　2回以上の方が7割以上を占める一方､来館経験なしと答えた方も約1割(5名）存在した。この結果からは、講演会を機に弥生の丘展示館へ初めて足を運ぶ方も一定数いると推測される。

情報入手先　市報が全体の約4割となり、従来よりも割合が増加したのに対し、ポスター・チラシの割合は減少した。コロナ渦の影響で、外出する機会が減少していることが影響している可能性がある。

次いでインターネット、新潟県が作成しているパンフレット「まいぶんナビ」と続き、これまでどおり一定の割合を占める。

講演会について　講演会については、概ね好評であったが、施設全般（照明・空調・バリアフリー）や内容の分かりやすさに関して不満もみられた。

また、意見・要望等の項目では、検討すべき貴重なご意見を多く頂いた。以下に主な内容を箇条書きで示し、今後の検討・改善の課題としたい。

なお、講演会場については、展示会場である弥生の丘展示館周辺、新潟市新津美術館との声が、今回のアンケートでの要望を含めてこれまでにも多く寄せられていた。令和4年度に予定している2回の企画展関連講演会については、弥生の丘展示館に隣接する新潟市新津美術館で行う計画である。

また、新型コロナウイルス感染対策として、会場では空調や窓を開けての換気を行ったが、会場が寒かったという意見も一部頂戴した。防寒についての事前連絡や周知などを徹底していきたい。

講演会場ついての要望

(第1回)

・市文化財センター。
・それぞれの施設及び近く。
・中央区等、もう少し市の中心地。

(第2回)

・新潟市新津美術館や県埋蔵文化財センターなど古津八幡山遺跡周辺で。
・新津美術館（野外ステージ)。
・新津美術館1Ｆレクチャールームなど。
・弥生の丘展示館。
・市文化財センターは公共交通機関で行きづらいのが難点。

講演内容について

(第1回)

・邪馬台国時代の新潟と静岡の関係性が明確でないながら、かすかに感じられて楽しかった。
・新潟のことについては最後にまとめて比較するくらいで良かったと思う。登呂、東海東部、関東の話をもっと聞きたかった。
・登呂を中心とした東海の遺跡と3世紀の新潟の関係がいま一つ解らなかった。
・マスクのせいか言葉の端々が聞き取りにくく、わからない所があった。

(第2回)

・分かりやすい資料でとても良かった。
・基本的なことで新たな知見が多くあった。
・少し早口、もう少しゆっくり。

希望するイベント・講演会について

(第1回)

・縄文時代から弥生時代への衣食住、生活様式の変

遷について。

・新潟平野の成り立ちが知りたい。その頃の暮らしが知りたい。角田灯台の岩や野積の枕状溶岩など、新潟平野のどこに火山があったのか知りたい。

・今回のような全国の有名な方をお招きして講演を聞きたい。

（第２回）

・火焔土器について。

・古墳について。自分は主にこれを専攻していて、これを是非して欲しい。

・県内の遺跡だけでなく、近隣の、長野の縄文や群馬の古墳など。オンライン配信でも良いので。

・新津丘陵のそれぞれの遺跡について。

その他の要望

（第１回）

・もう少し展示スペースを広くして、展示資料を多くしたらどうか。

・天候のためやや寒かった。コロナ対策で必要性は充分わかっているが、換気・空調に工夫してもらいたい。

（第２回）

・これからもいろいろなイベントをしてほしい。

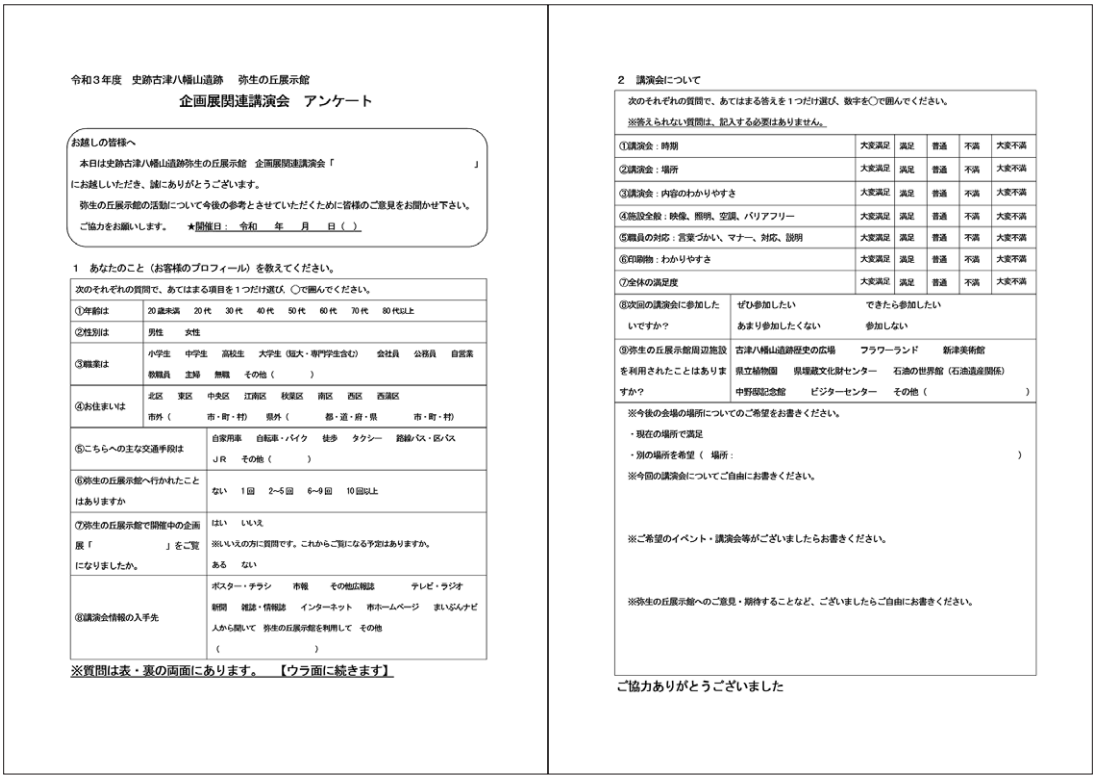
・去年11月に江戸東京博物館の縄文展に行った。気にいった土偶を、気にいった理由とともに投稿する企画があり、おもしろいと思った。そのように、若者がくいつきやすい、インターネットを使った企画をしてみてはどうか。

・今回の企画展の見学が楽しみ。

・換気のため寒さ対策を、とあらかじめ伝えてくださる心配りに感謝。

講演会の様子（第１回）

講演会の様子（第２回）



令和３年度　史跡古津八幡山遺跡　弥生の丘展示館

企画展関連講演会　アンケート

お越しの皆様へ

本日は史跡古津八幡山遺跡弥生の丘展示館　企画展関連講演会「　　」にお越しいただき、誠にありがとうございます。

弥生の丘展示館の活動について今後の参考とさせていただくために皆様のご意見をお聞かせ下さい。

ご協力をお願いします。　★開催日：　令和　　年　　月　　日（　）

１　あなたのこと（お客様のプロフィール）を教えてください。

次のそれぞれの質問で、あてはまる項目を１つだけ選び、○で囲んでください。	
①年齢は	20歳未満　20代　30代　40代　50代　60代　70代　80代以上
②性別は	男性　女性
③職業は	小学生　中学生　高校生　大学生（短大・専門学生含む）　会社員　公務員　自営業 教職員　主婦　無職　その他（　　）
④お住まいは	北区　東区　中央区　江南区　秋葉区　南区　西区　西蒲区 市外（　　市・町・村）　県外（　　都・道・府・県　　市・町・村）
⑤こちらへの主な交通手段は	自家用車　自転車・バイク　徒歩　タクシー　路線バス・区バス ＪＲ　その他（　　）
⑥弥生の丘展示館へ行かれたことはありますか	ない　１回　2~5回　6~9回　10回以上
⑦弥生の丘展示館で開催中の企画展「　　」をご覧になりましたか。	はい　いいえ ※いいえの方に質問です。これからご覧になる予定はありますか。 ある　ない
⑧講演会情報の入手先	ポスター・チラシ　市報　その他広報誌　テレビ・ラジオ 新聞　雑誌・情報誌　インターネット　市ホームページ　まいぶんナビ 人から聞いて　弥生の丘展示館を利用して　その他 （　　）

※質問は表・裏の両面にあります。　【ウラ面に続きます】

２　講演会について

次のそれぞれの質問で、あてはまる答えを１つだけ選び、数字を○で囲んでください。 ※答えられない質問は、記入する必要はありません。					
①講演会：時期	大変満足	満足	普通	不満	大変不満
②講演会：場所	大変満足	満足	普通	不満	大変不満
③講演会：内容のわかりやすさ	大変満足	満足	普通	不満	大変不満
④施設全般：映像、照明、空調、バリアフリー	大変満足	満足	普通	不満	大変不満
⑤職員の対応：言葉づかい、マナー、対応、説明	大変満足	満足	普通	不満	大変不満
⑥印刷物：わかりやすさ	大変満足	満足	普通	不満	大変不満
⑦全体の満足度	大変満足	満足	普通	不満	大変不満
⑧次回の講演会に参加したいですか？	ぜひ参加したい　できたら参加したい あまり参加したくない　参加しない				
⑨弥生の丘展示館周辺施設を利用されたことはありますか？	古津八幡山遺跡歴史の広場　フラワーランド　新津美術館 県立植物園　県埋蔵文化財センター　石油の世界館（石油遺産関係） 中野邸記念館　ビジターセンター　その他（　　）				

※今後の会場の場所についてのご希望をお書きください。

・現在の場所で満足

・別の場所を希望（　場所：　　）

※今回の講演会についてご自由にお書きください。

※ご希望のイベント・講演会等がございましたらお書きください。

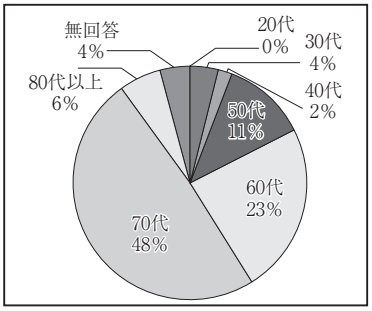
※弥生の丘展示館へのご意見・期待することなど、ございましたらご自由にお書きください。

ご協力ありがとうございました

アンケート用紙（表・裏）

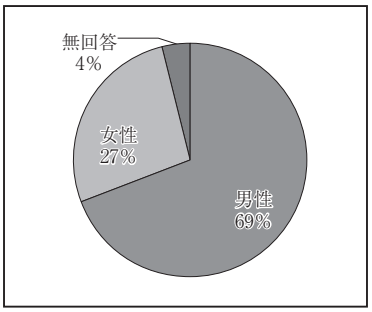
1.年齢

20歳未満	1
20代	0
30代	2
40代	1
50代	6
60代	12
70代	25
80代以上	3
無回答	2
計	52



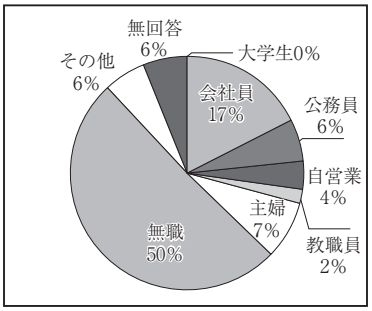
2.性別

男	36
女	14
無回答	2
計	52



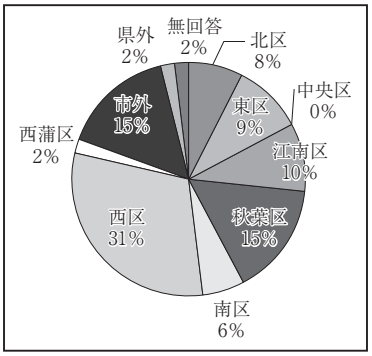
3.職業

小学生	1
中学生	0
高校生	0
大学生	0
会社員	9
公務員	3
自営業	2
教職員	1
主婦	4
無職	26
その他	3
無回答	3
計	52



4.住まい

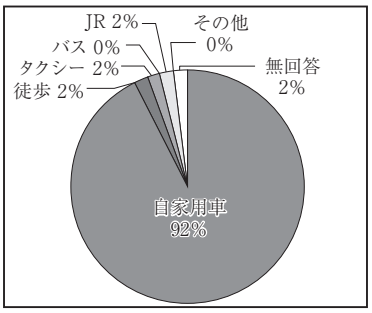
北区	4
東区	5
中央区	0
江南区	5
秋葉区	8
南区	3
西区	16
西蒲区	1
市外	8
県外	1
無回答	1
計	52



5.交通手段

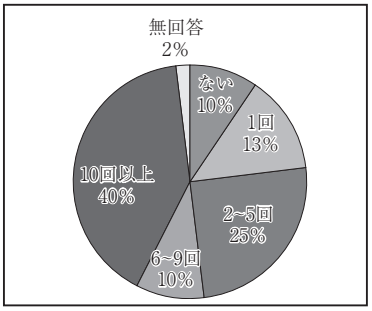
自家用車	50
自転車・バイク	0
徒歩	1
タクシー	1
バス	0
ＪＲ	1
その他	0
無回答	1
計	54

※複数回答あり



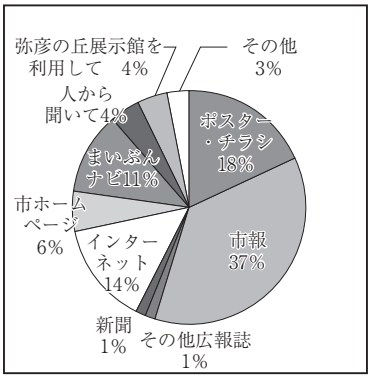
6.弥生の丘展示館来館回数

ない	5
1回	7
2～5回	13
6～9回	5
10回以上	21
無回答	1
計	52



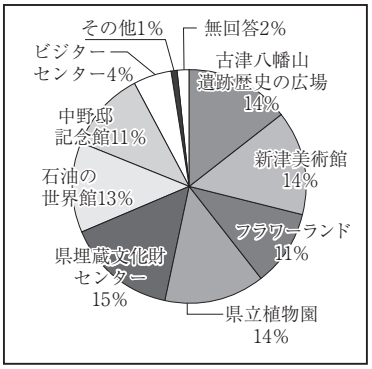
7.講演会情報入手先（複数回答あり）

ポスター・チラシ	13
市報	26
その他広報誌	1
テレビ・ラジオ	0
新聞	1
雑誌・情報誌	0
インターネット	10
市ホームページ	4
まいぶんナビ	8
人から聞いて	3
弥生の丘展示館を利用して	3
その他	2
計	71



8.弥生の丘展示館周辺施設の利用（複数回答あり）

古津八幡山遺跡歴史の広場	38
新津美術館	38
フラワーランド	28
県立植物園	36
県埋蔵文化財センター	40
石油の世界館	33
中野邸記念館	29
ビジターセンター	14
その他	2
無回答	4
計	262



9.弥生の丘展示館周辺施設の利用（複数回答あり）

	大変満足	満足	普通	不満	大変不満	無回答	計
時期	9	19	19	0	0	5	52
場所	12	21	15	1	0	3	52
内容のわかりやすさ	7	20	13	6	0	6	52
施設全般：照明、空調、バリアフリー	6	22	12	5	2	5	52
職員の対応：言葉づかい、マナー、対応、説明	9	27	10	1	0	5	52
印刷物：わかりやすさ	7	17	14	6	1	7	52
全体の満足度	5	25	11	3	0	8	52

アンケート結果一覧（２回分の講演会の合計）

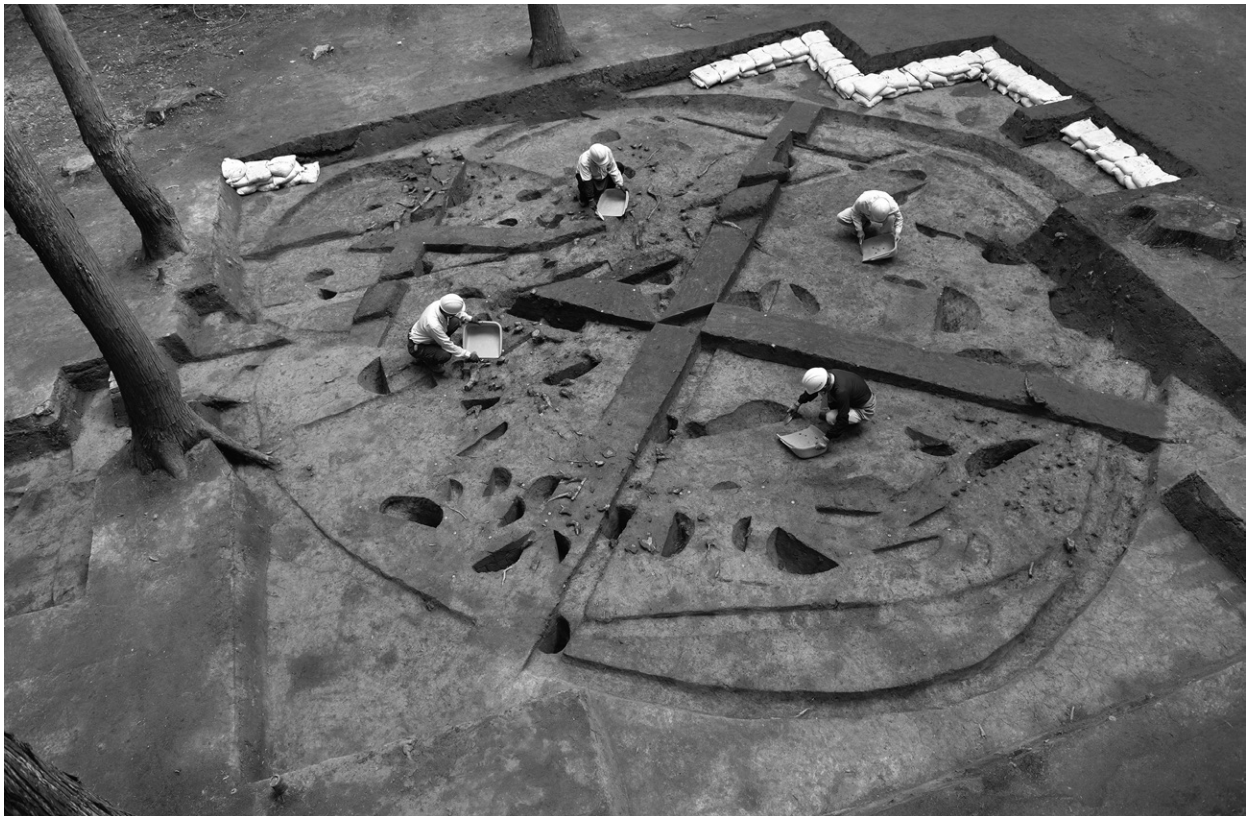
アンケート結果一覧（講演会別）

	項目		第１回	第２回	計
プロフィール	年齢	20歳未満	0	1	1
		20代	0	0	0
		30代	1	1	2
		40代	0	1	1
		50代	4	2	6
		60代	9	3	12
		70代	16	9	25
		80代以上	2	1	3
		無回答	0	2	2
		計	32	20	52
	性別	男	25	11	36
		女	6	8	14
		無回答	1	1	2
		計	32	20	52
	職業	小学生	0	1	1
		中学生	0	0	0
		高校生	0	0	0
		大学生	0	0	0
		会社員	6	3	9
		公務員	2	1	3
		自営業	1	1	2
		教職員	1	0	1
		主婦	0	4	4
		無職	20	6	26
		その他	0	3	3
		無回答	2	1	3
		計	32	20	52
	住まい	北区	3	1	4
		東区	2	3	5
		中央区	0	0	0
		江南区	4	1	5
		秋葉区	6	2	8
		南区	1	2	3
		西区	8	8	16
		西蒲区	1	0	1
		市外	6	2	8
		県外	1	0	1
		無回答	0	1	1
		計	32	20	52
	交通手段（複数回答あり）	自家用車	30	20	50
		自転車・バイク	0	0	0
		徒歩	1	0	1
		タクシー	1	0	1
		路線バス・区バス	0	0	0
		ＪＲ	1	0	1
		その他	0	0	0
		無回答	1	0	1
		計	34	20	54
	講演会情報入手先（複数回答あり）	ポスター・チラシ	4	9	13
		市報	19	7	26
		その他広報誌	1	0	1
		テレビ・ラジオ	0	0	0
		新聞	0	1	1
		雑誌・情報誌	0	0	0
		インターネット	7	3	10
		市ホームページ	1	3	4
		まいぶんナビ	5	3	8
		人から聞いて	1	2	3
		弥生の丘展示館を利用して	1	2	3
		その他	2	0	2
		計	41	30	71

	項目		第１回	第２回	計
講演会・講演会場（新潟市文化財センター・新潟県埋蔵文化財センター）などについて	時期（無回答あり）	大変満足	5	4	9
		満足	11	8	19
		普通	13	6	19
		不満	0	0	0
		大変不満	0	0	0
		無回答	3	2	5
		計	32	20	52
	場所（無回答あり）	大変満足	5	7	12
		満足	12	9	21
		普通	11	4	15
		不満	1	0	1
		大変不満	0	0	0
		無回答	3	0	3
		計	32	20	52
	内容のわかりやすさ（無回答あり）	大変満足	3	4	7
		満足	8	12	20
		普通	11	2	13
		不満	6	0	6
		大変不満	0	0	0
		無回答	4	2	6
		計	32	20	52
	施設全体：映像、照明、空調、バリアフリー（無回答あり）	大変満足	2	4	6
		満足	12	10	22
		普通	9	3	12
		不満	4	1	5
		大変不満	2	0	2
		無回答	3	2	5
		計	32	20	52
	職員の対応：言葉遣い、マナー対応、説明（無回答あり）	大変満足	4	5	9
		満足	15	12	27
		普通	9	1	10
		不満	1	0	1
		大変不満	0	0	0
		無回答	3	2	5
		計	32	20	52
	印刷物：わかりやすさ（無回答あり）	大変満足	1	6	7
		満足	9	8	17
		普通	13	1	14
		不満	5	1	6
		大変不満	0	1	1
		無回答	4	3	7
		計	32	20	52
	全体の満足度（無回答あり）	大変満足	2	3	5
		満足	12	13	25
		普通	10	1	11
		不満	3	0	3
		大変不満	0	0	0
		無回答	5	3	8
		計	32	20	52
	次回講演会に参加したいか（無回答あり）	ぜひ参加したい	21	10	31
		出来たら参加したい	7	8	15
		あまり参加したくない	2	0	2
		参加しない	0	0	0
		無回答	2	2	4
		計	32	20	52
	今後の会場（無回答あり）	現在の場所でよい	16	13	29
		別の場所がよい	3	3	6
		無回答	13	4	17
		計	32	20	52

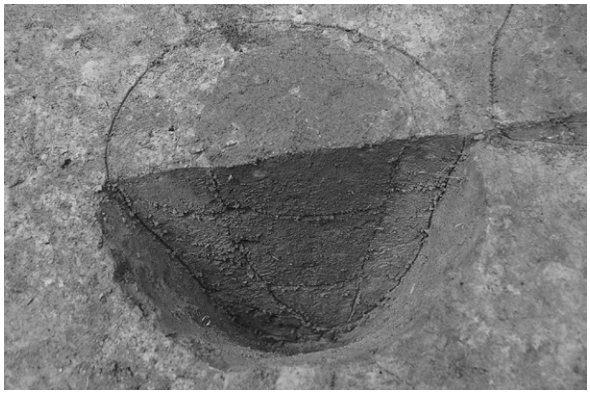
	項目		第１回	第２回	計
企画展会場（弥生の丘展示館）などについて	来館回数	ない	3	2	5
		１回	6	1	7
		２～５回	8	5	13
		６～９回	4	1	5
		10回以上	10	11	21
		無回答	1	0	1
		計	32	20	52
	開催中の企画展を見た（無回答あり）	はい	14	6	20
		いいえ	14	13	27
		無回答	4	1	5
		計	32	20	52
	開催中の企画展を見る予定（無回答あり）	ある	16	10	26
		ない	0	1	1
		無回答	2	3	5
		計	18	14	32
	弥生の丘展示館周辺施設の利用（無回答･複数回答あり）	古津八幡山遺跡歴史の広場	24	14	38
		新津美術館	24	14	38
		フラワーランド	19	9	28
		県立植物園	23	13	36
		県埋蔵文化財センター	24	16	40
		石油の世界館	22	11	33
		中野邸記念館	19	10	29
		ビジターセンター	8	6	14
		その他	1	1	2
		無回答	1	3	4
		計	165	97	262

（3）令和２年度古津八幡山遺跡発掘調査写真



大型竪穴建物調査風景（北西から）

大型竪穴建物全景（南東から）



大型竪穴建物の柱穴断面

竪穴住居調査風景（南東から）

竪穴住居の柱穴断面

講師略歴

篠原　和大（しのはら　かずひろ）
熊本県熊本市出身
静岡大学人文社会科学部教授

田中　耕作（たなか　こうさく）
新潟県新発田市出身
新潟市文化財センター

令和３年度
史跡古津八幡山 弥生の丘展示館
企画展関連講演会　記録集

編集・発行　新潟市文化財センター
〒950-1122　新潟市西区木場2748-１
TEL　025-378-0480　　FAX　025-378-0484
発行日　2022年３月25日
印　刷　株式会社ハイングラフ